ぼくの雑記帖——中田満帆詩集

未収録作品集

2003-2018

a missing person's press

ぼくの雑記帖——中田満帆詩集／未収録作品集

かつて

わたしは、

翼を失った飛行機を見た。

グイム・ヴェンダース「かつて……」

われわれはやがて雨となり、河となり、多くのまちがいのなかで見えないなにかとなって喪われていく。

ぼくの雑記帖——中田満帆詩集／目次

ぼくの雑記帖	* 15
おもいそびれた日	* 16
ぼくは退屈しない	* 18
速度狂	* 23
夜	* 27
八月の弔い	* 31
放浪のはじめ	* 35
どろぼうたちの帽子	* 37
宿酔	* 39
雨衣	* 41
義手	* 43
空域	* 45
糸車	* 47

追走	* 49
赤い柄の鋏	* 51
雨のなかのひと殺し	* 53
冬の格子	* 56
動物園	* 59
海	* 61
未明	* 63
白かったり、灰だったり	* 66
光りについての短詩篇	* 70
雨季の象形	* 78
太った聖者	* 83
不在の梯子	* 85
ふたたび去つていくものは	* 87
天皇誕生日	* 90
いかれた教会のスケッチ	* 94
解体される城のスケッチ	* 96
門番	* 99
ぼくよ、みずからの詩でみずからのくそをぬぐえ	* 103

- もたぎるもの、おきざられたもの * 111
 ピアノを挟じ開ける男たちのまえで * 113
 美しい蛇に美しい石を振り下ろせ * 115
 天使のいざこぎにまきこまれたあわれな泥棒たちへ捧ぐ * 118
 墓場のなかでおれは涙をかんだ * 120
 でるところも入るところもない場所から絵が産まれようとしてる * 122
 ジャツクの赤い靴下 * 126
 土曜日 * 129
 月曜日 * 132
 詩と蚊の関係についての序説 * 134
 わずか週五〇〇円で詩が書けないときの過ごし方を教えます * 136
 おれはヌエ * 138
 老人のぼく * 140
 深夜 * 143
 青銅 * 145
 雨季 * 147
 燃え殻 * 149
 無名 * 151

	ぼくは小説家になろうかとおもった。	
		* 152
象	* 155	
おれは駐車場が好きだ	* 158	
ハタネズミと一時解雇	* 160	
火影	* 165	
三月	* 171	
四月	* 174	
五月	* 177	
夜と午の歌	* 179	
鳥どもの祈り	* 180	
なにかにむかって犬が吠えてる	* 182	
夜の情熱天使からの塵顔	* 184	
ホテル・ジュークボックス	* 186	
生田警察署	* 188	
一緒にゆれよう	* 189	
声	* 190	
秩序	* 192	
悲しみ	* 195	

午前七時	*	197
阪神競馬場	*	199
孤立	*	200
結句	*	202
憧憬	*	204
加納町歩道橋	*	205
真夏日	*	206
かの女たちへ	*	208
暮れの点景	*	210
熾き火	*	212
ひざかり	*	214
安全地帯	*	216
怖れる子供	*	218
空白みたいなもの	*	220
秘密	*	221
共鳴	*	223
ベースボール・ゲーム	*	225
拳闘士の休息(無修正版)	*	227

鏡	*	233
再会	*	235
銘木	*	236
隣人	*	238
多かれ少なかれ	*	241
ロートムービー、ロツクンロール、アメリカ、天使。	*	244
主題歌	*	253
成人通知	*	256
ブrossの下着	*	260
無意味	*	262
ハイヒール	*	264
A Dream Are What You Wake Up From	*	266
使用人たちの幼年期	*	270
聖家族	*	273
父	*	275
母	*	278
かろうじて	*	280
トイレット・ペイパーに書かれた最後のラヴポエム	*	281

十二月の旅	* 282
縁日の世界	* 284
かつての愛のために	* 287
カツカワさんからの葉書	* 289
きみはおれのなまえを知ってる	* 291
通好みのシ人	* 296
清順が死んだ夜	* 300
部外者	* 303
愛	* 305
きみにとっておれが善良でなくとも	* 309
豚	* 311
初詣	* 313
一月	* 316
祝婚歌	* 318
母碑銘	* 323

裝丁——著者自裝

for Yoshihito Arakida

2003

ぼくの雑記帖 03/06/17

はじめての詩

真夜中

テレビのなかに新聞記事の荒野が見えた
するとぼくの雑記帖のなかにも
再現された路地裏が貫通した

ぼくの右の耳がびくびくと動いてラジオを差したとき
新聞記事の荒野にはラジオ欄の畑ができて
さらに番組の実がなった

そしてぼくの雑記帖のなかには
ラジオでかかった歌のなまえや
テレビに映ったぼくとおんなじなまえの女の子のことが
下手な字になってざわざわとなびいていました。

おもいそびれた日

この詩はのちに記憶を頼りに書かれたものである。

急行列車のなか

昼夜逆転でつらく

眼鏡の女の子が愛らしくみえた

ほっぺたがふっくらしてるのが

ほっぺたがうすく赤いのが

この子の裸のおなかをみたいとおもった

化学の授業は元素記号のなまえをだらだらとならべ

背のちいさい禿の教師は植木等の「ハイそれまでヨ」を唄った

ぼくにもしてできるならエレファントカシマシの「待つ男」を唄ってやりたい

つまりぼくはぼくのことを知らないぼくをきらいなひとびとに

ぼくの胸のうちを知って貰いたいんだ

好きな子がまたいるんな男たちとふざけあってる

キタムラ・ユウコさん、

あなたとはもう会うことはないだろう

もうじきさよならだ

いまもできるなら三上寛の「カラス」を唄いたい

つまりはぼくという存在の現実を破りたいんだ

でも詩のなかですら現実を越えられないぼくとはいったいなんなのか

授業が終わった

来週には卒業式の予行がある

落第したぼくは唄いそびれるだろう、

「仰げば尊し」のテープを燃やしたい。

ぼくは退屈しない

ぼくは退屈しない

朝 目を覚ました とたんに窓のむこうから

石がとんで来てガラスをやぶってぼくにとどいた

石には

——Bon jour! Ca va? (こんにちは! 調子はどう?)——

と書いてあった

畑から飛んできたようで

hoshi-gata
星型のがらすのやぶれをのぞくと

inai-to
稲穂のなかでかかしが笑っているのでぼくはたいくつしない

いっぼんきりの安いシガレットを筆入れにかくして

ぼくは昼の町へ出た

町には いろんなごみがころがっていて面白い

バケツを見つけたので蹴とばすと

なかからカエルが出てきて

唄を唄ってくれるので退屈しない

映画館へ入れば ぼくのかわりに スクリーンで

ぼくのにくい人を（にくくない人も）殺してくれるので

ぼくはいっこうに退屈できない

しばらくたつと

なつかしく

スーパーマーケットの野菜がひかりだし

もう夜か

金色のバスにのって帰ると

門の前にぼくの猫がぐったりしていた

へんだなとおもいいつつ ドアをあけると

真っ白い男が立っていた

真っ白いサングラスでぼくを見る

へんだなと思いつつ 書斎へ行こうとしたら

「こんにちは！調子はどう？」

そうどなって来たので

「さようなら」

そう返事をしたとき

ぼくは思い出した

きのうのニュースにのっていた「白い無頼^{White Noise}」のはなしを

まずいぞ、どうにかして――

考えるひまもなく

ぼくはピストルをつきつけられて

いきなりにズンツと撃たれた

ぼくは倒れ 白い無頼の男は 星型のやぶれから

とんでった ぼくは倒れけど

香水のいい香りと少年らしい歌声^{in the song}が どこからともなくするので

どうやら ぼくは さいごまで退屈しないようだ

そこへ また石がとんできた

その石には ——Adieu (おようなら)—— と書かれてある

やっぱり ぼくは ちいこまで 退屈しないようだ

2004

速度狂

詩に感傷も美しさももういらぬ

そんなものはおやじやおふくろにぬりたくって

臍を齧るときに使えばいい

ねぐらでダサイ文学青年きどりよ、土台

きみはことばを定規で測れても

感情をことばになんかできまいよ

感情そのものが足りないのだ

いついつまでもひとの評価を気にしつづけて

なにも書けなく

なるといい

なにわナンバーの乗用車

急に停まるな

夜のふたり乗りは危険だよ

おれがうしろから見えているからな

歩いて

くる

短すぎるスカートの高校生、三人

うしろからそつとスカート捲りがしたくなった

パンティの人気商品調査ってやつがしたくなった

でもスカート捲りなんて もう

ふるくさい

おれは生まれてくる時代を

まちがえたのか

いや

どっちにしろおれは見られないほど

ねくらでかっこわるい文学青年きどりだ

日活アクションのきざやろうにもなれやしない

欲しいものは

金でも

鍛錬でも

買えないものばかり

おお、ふさいくな顔！

ああ、ふさいくな軀！

どうしようもないのだ スカート、さよなら

こんばんは スクーター、山田ナンバー

とろいおしやれなスクーターめ

おしやれなヘルメットにおしやれなゴーグルしておまえはおしやれな女か

女は車もバイクも運転するな

乳母車でも押してろ

買物かごでもさげてろ

乳母車でも押してろ

子供でも産んでろ

おれをこれ以上悲しませるな

悲しませないでください

追い越してやるぜ うしろから来たバイクに

便乗しておれのカブで追い越してやった

もう詩に

おっとチェーンがいやな音をわめく

理想などいらぬのだ

いるのは目に見えるものへの

敵意と

果てない悪意と

パンチと

欲と

あざけり

なのだ

ねくらでダサイ文学青年きどりよ

つまりおれは

もうきみのように

しみつたれたくはない

もうおれはきみではないのだ

夜

おもてに広がっていく夜

たった二つ三つ文字盤を擦っただけで

もう、そとは黒

ひとはマッチをたずさえ

夜というものにそなえる

黒のなかに姿が消えてしまわないよう

ロウソクに火を点し

音が消えてしまわないように

楽隊を呼ぶ

そうしてみなは呼ぶのだけれど

おれの楽隊は皿の料理から生まれ

食卓のなかでいつもゆがんでいる

ほら、

フオークを掴んだら

演奏が始まった

この音がそちらにも聞えるだろう

この姿が近眼のあなたにもおわかりだろう

もっと近づいて

よくごらんください

あいつのトロンボーンの舐先へ

ゆっくりと流れていくやつ唾液を

あいつのギターの弦から染み出した肉汁を

ドラムのヘッドで踊るコンソメスープと具の玉葱を

もっと近づいて

よくごらんください

お気に召しましたか

この気持ちのよい演奏を

しかし食べ終わると同時に崩れてしまうのです

もっと近づいてよくごらんください

トランペットとトロンボーンが

仲良くハンバーグに融けましたね

サククスはライスをギターに吐きかけて消え
ベースは声をあげてドレツシングの壇に倒れた
最期にピアノが余韻を残しながら
残ったスープに沈んでいく
おれの楽隊はいつもこうして崩れてしま
う
もはやロウソクの火も消え
黒に染まりながら
悲しみに堪えきれなくなったおれは
やけになって皿に顔をうずめる
そして心にもないことをいうのだ
やめてくれという胃のなかの悲鳴を聴きながら
おれのからだは
半分、黒
ああ、もうすっかり不良少女になってしまったYよ
染まりきらないうちに結婚してくれ
いま、おまえが欲しいのだ
おれの楽隊は消えて
もうなにも残らない

ただ夜があるばかりで
もうおれもない

八月の弔い

黒い葬列

ゆるゆるとのびていく

黒い葬列

のろのろとのびている

黒い葬列

融けだしたように進んでいく

黒い葬列

どこまでも八月の終わりをゆくなか

黒い葬列

陽射しはとともつよい

黒い葬列

くり返されて

そのたびに少しづつ澗んでいく

黒い葬列

ぼくはそのなかから疲れ切った男をつまむ

するとやつは風船のようにわずかな吐息を吐いて澗んだ

ぼくは次にひとりの少年をつまむ

かれはばちんと勢いよく弾けた

ひとりの少女を次につまむ

かの女はどんどんまんまるく膨らんでった

終いにひとりの青年をつまむ

かれはしゅつと空気をいわせながら、

かるやかに青空を昇った

その青空も今では冬のそれ

2005

放浪のはじめ

孤独が夜更けてひとり歩きだした

叱られていき場のない少年のように

十五のころに帰ったように

看板のなかの

派手なべべを着た娘の

その胸に手をあててみたり

雨に溶けだした聖母像の肩や頬に

顔をすり寄せてみたりして

孤独にいつそう磨きをかける

触れられるのはとまっているものだけ

美しく見えるのはとまっているものだけだ

動けないもののために美があり

いき場のないもののために美があり

触れさせる孤独がある

しかし触れたってなにもないのだけれど

なにもないのがなおさらに愛しく

なにもないところに放浪ははじまる

どろぼうたちの帽子

二月

求められないままに

どろぼうたちの帽子が吹きあげられる

ばらばらになったかぜのなか

すべてを見下ろすように青い天板へ

とがめられたのはなによりもさもしいぼくだ

燈のもと

石のまえ

人のうら

翳のみぎ

傷つけてやまないものへかの女は吹き込む

吐息のようなちいさな歌を

だれもそれに応えることはできない

帽子がゆっくり落ちて来た

見ればすぐその木のような青年に罪は育ちつつある

宿酔

天の車窓が時を抛る

光りが落ちてきて

きつくひとみを湿らせる

中夜になら天使が見えただろうが

ぼくにはただ苦しいだけ

宿酔いのあたまたに始発の鐘は鳴りつづけ

咽の砂漠を洗い流しながら

乗らないままの一行を見送る

だれにだって宿命はあろうけど

ぼくにはなにも見えない

時刻表はいじわるをする

文字列を乱して突き落とそうとする
からかってやるとかれは決まり悪そうに
ぼくが乗るべきものを示した
二月の空気をやぶる燕

吹き流されそうな両手をポケットにつめ
線路に誘われる女のひと
次の時間を教えてやったら

ありがとうと微笑みながら落ちた
女の笑顔ってなんて恐ろしいんだろうと
ぼくは待合室へと急ぐ

雨衣

夢野を水牛が通る日

大衆食堂の脇でぼくは嗚咽する

永い観衆のもとに日は落ちていき

夜の雨がなにもかも淫靡にした

吸いすぎた両切りの臭味

春畠のほうへひくく走る藁

とうに忘れてしまっただれかのせりふ

うんざりしてぼくは口にする

がちがちに乾いた犬の糞が

水たまりで息を吹き返す

やつらは卑怯にも嘘を金にする

いっただれが道を引いてるんだ

おんなどやりたいばかりに

あの男はみどりを焼いて死んでいった

恐ろしいほどに葉は蒼くしげる

ぼくはそこに雨衣を投げてやればいいのか

義手

花や風のうえをかれは走っている

黒い帽子のうえに手をやって

颯爽と死をめざしながら

苦しみにはまだ早すぎるというのに

薄汚れた町に声はどれも遠く

はらわたのなかにかすかな爪あとを残す

おれはだれよりも遅くペンをとって

窓枠のむこうについて書きだした

きみはどれも信じないだろう

書くことがどんなにうそを好むかも

きみの腕の細さに訊いてみるがいい

いつかきつと答えが現れるから

朝の刻のなかで死のおとが鳴った

耳をすます姿はいつもまぬけで

ことばはまるで義手のようだ

どんな近づいても

あやふやでにふい感触が

とどこうとして

とどいてはいない

空域

おそらく大勢の詩人たちが宙に浮いているというのに
ぼくには飛ぶ空がない

時代から取り残された残り火として
ただ未明のかすかを照らしているだけだ

おもいだしてみればいい

きみが廃墟の配電盤をあけたとき

たくさんお雀蜂がきみになにをいったかを

ぼくらは棄てられた貯水タンクのうえで

ひそやかな暗号を交わしたはずだ

記憶はどれだって遠いものだ

裏切るものをつくるためにぼくらの幼年期は過ぎて

あとに残るのはたくさんの狐火
生野高原の森のなかでぼくが放った多くの言葉は果たして石となり
草の実にかわる

数多い葉っぱのなかで

雨に濡れながら息絶えている

共有するものはなにもない

ただ孤立だけは歳月をかけて

あじわっている

ぼくには飛ぶ空がない

ぼくには走る原がない

ぼくには唄う歌がない

ぼくには見る色がない

ぼくには描く人がない

ぼくには愛す人がない

ぼくには名乗る名がない

糸車

落ちて転がるさきには手がある

ふたりの手がすばやく

つながれたり

はなされたりを

くり返しながらかけのなかを泳ぐ

昼の甘ったるい匂いがかれらを誘い

そらへ吊りあげられるのもそう遠くはない

温かな戸口から昏い廊下へ糸車は走り

ふたりの手をすばやく巻きこんでぬく

とまどいやためらいには戻れないだろう

透きとおった針が縫いつけながら昇り

ぜんぶ肯かせてしまう

いばりや雨のように拒みは流れ失せ
ふたりは午後の向こう
うたたねのなかで砕けてしまった

追走

とかげだ

とかげ

ひた走るのは半分ばかり遠いぼく

なにを知りたがったのでもなく

ただそれを欲しがったとき

小さなかたちにすべてをおもった

かえるだ

かえる

みずからを遠ざけたいばかりに

きらいなものを追いかけて
追い払っている

のらねこだ
のらねこ

だれかをあやめたくて
ゆうぐれを歩いても
目にするのは忘れていたあの日

赤い柄の鋏

はずんだ綿パンの臀が木の向こうに沈んでいく

赤い柄の鋏をもって姉は花狩り

嵐の翌日に万物はゆるみきって

ところどころ溶けている

濡れているものはどれもこれもイヤラシイ

妹たちは犬の散歩に頑としていこうとしない

そのいっぽうで遭難者たちは

夕までにみな帰る

濡れていたものは乾き

狸は庭から引き揚げ

鳥は廃ダムの巣にもどって

ただひとり狡猾なおれが昇りたての月をもぎ取っていく

録をもって姉は目下、行方不明

雨のなかのひと殺し

中降りのなかをおまえは立っていたね。時刻を確かめながら午后を全身に浴みてほえんでいた。ちょうど仕事を終えてのところ、雨衣のうちがわにたくさんの死に顔を匂わせておまえは雨のなかにいた。

雨は言の葉をそのおもてをなめらかにしてくれる。そのしたたりのなかでたやすく想像されていく風景はおまえがそこにいなくとも、そのすがたを雨が描きだしてくれるだろう。すべてをすみやかにして映すのだよ。——

ぼくは群れむれに踏み荒らされたようなアパートメントの一室から、あらゆる疎外や孤立から遁れようとして、おまえは白い邸の空白を奪おうとしてあの場面に立っていた。わかるだろう、自己憐憫の沼を一刻も早く抜け取ったのだ。

午後四時を過ぎてその邸宅は丘のうえに現れる。灰色の柵とむろの木にかこまれた白壁のむこうにふたりの人物が息をしている。オールズモビルは青く、それを追いかけて停車していた。あとに目立つものはなく、うねりのある市道がふたつ丘を這い、いっぽうは市街へ降り、もういっぽうは逃亡の森を進んでいた。

雨はまだ大人しく、のちの銃声を匂わせてはいない。ただ軽快な調子で木のそとがわをひびかせ、秋の前線を奏で、ぼくらを撫ぜまわしていた。——

おそらくあの女はなにも知らなかっただろう。乳白色の粉末になにが隠れていたかを。――下卑な男に吞まされ、素裸のまま椅子に坐っていた。大いなる眠りをその正面において。――さあ、三つ数えるんだ。――ぼくとおまえが入るべき戸口に立ってそのそとがわで指を鳴らしてしまっただ。ぼくは金を、おまえは秘密を求めて戸をひらく。駈けた足が見るのは死んだ男と魂しいを失った女だ。銃声はすでに硝煙でしかなかったね。雨のなかに完熟するような果実の匂い。ぼくらはふたりそいつを楽しんだっけね？

ぼくは金を、おまえはフィルムを運び去っていった。ぼくはおまえが放った銃弾の色やかたちだけでなく、旋状跡だってあたまのなかさ。女陰を一瞬のうちに温くさせる、その声をぼくはしかと聞いていた。ぼくらは見ることその内部に所有を増やしていく。ぼくらは聴くことで内部に路次を産む。ぼくらは考えることで内部に穴を穿つ。だれが被害者でだれが加害者か、見わけのつかないなかでぼくらは澄み切った犯罪者だ。大きな鳥が探偵という羽と落ちてきてうちわがわの虫を啄ばもうとする。それを喰いとめようとしていったい、いくつの弾倉をからっぽにしたのかもおまえはわからない。――。

おまえはおまえへの要求を欲した。おまえは殺すことでひとびとから要求をとり去ってあげた。それはおまえがしてやれる、ただひとつのやさしさ、野兎のような非情さだった。ぼくは檜皮で葺いたような魂しいをおまえの顔に叩きつけてやまない失われた週末の一日だ。ぼくを殺そうとするおまえにぼくの左手が光る。心臓の、魂しいの縫い目を光りは引き裂き、倒れるおまえ。さようならだ。これが長いお別れの仕方だ。ぼくの分身のあとかたもない。雨のなかの人殺しとしてぼくらは存在していた。きつとアパートメントの一室ではふたつを待ちく

たびれたスクランブルド・エグスが冷めて眠りつづけているだろう。もう雨もやみそうだ。

遠くの町町をぼくは丘から見おろす。都市間鉄道の小さなラインがおぼろげに揺れている。きっと未明には見知らぬ乗客たちが青いダリアを密かに抱き、金貨一枚分の再生を祝うだろう。聖なる森を目指しながら。まるで高い窓に立っているようだ——end

冬の格子

動くものはみな失われた領地を過ぎる

多くの戻つてこないものを

感じさせて雪はある

村あかりぼんやり

電柱の群れを格子にして

どこへもいくことができない

眼をこらす

あかい頬の女が

ゆっくりりと越境した

でもあれはけつきよく

ひとのようでひとでないもの

2006

動物園

(見る) だれもかれのなまえを知らないし だれも知ろうとしない 見られ 覗かれ 触られ 汚され 洗淨
され 閉じ込められ 少しでも解き放たれる かれ

(見ている) 動物園のなかをくまなく かれを 覗き 触り 笑い 汚し 追い込んで ひっぱって 少しだ
け閉じ込められる ひと 見られたものはたちまちにきずを得て 見るものは昏い愉しみとわだかまりをいつま
でも曳きずるだろう

(見る) おまえのなまえも知らずに 金属の名札をだれも読もうとしない ぼくはどこから来たのか 見るた
めに来て いつのまにか見られている 視線を移すことなんか幾らだってできる しかしてできない 見返してし
まえば 一瞬にしておまえの番なのだが

(見る) 見られる その両方から遁れられない ぼくもみんなもそれを知ってるだろう それでいいかと問わ
れれば ぼくはしずかに頷こう

(見る) ぼくがいま見るのは どこをいっても寂しい国道の大通り 橙色の灯りが点り 踏み散らされたあの
土地にはもうだれも来ない あたらしいものを見ようと みんなはでていってしまった 見られることを嫌悪し
ながら ひどく愛しながら

(見られてる) 秋の前触の夜 おまえがぼくを見ている

海

午前0時も半ばを過ぎて ヨット・ハーバーの周りには 黒い潮風と引き揚げられた古ボートが眠っている
白くぼやりと浮かぶのは 疲れ切って萎えた帆

その白さに小指ほどの言葉を当てはめながら歩く ただ来てしまったから歩く なにひとつ意向を持たず歩く
陰が歩行者を支え 時折突き崩し 数え切れない羞恥にきつく胸を振らせる

あれはいつたいたれだろうか 酒に酔ってふらついている男は灯台の裏手にふかく沈んでいく 帰れないのだ
夜風が足につつかかる

たったいま午前一時を過ぎ 港のまえには黒い車が停まっている 朝を待って眠る また酒を呑んでしまった
のだ 海のもっとも黒い部位 あそこへ飛び込めば心臓も止まるだろう

2007

この時間になると

飾られてゐた絵はがきは

小さくちぎれてジャケットのなか

落ちつかない息をして

見つめてる

兄弟よ

もう眠りな

煙突のむこう

うなずくものがあつて

きみたちの眼に首をふるものがある

かたちのちがう文体でなるべくやさしいやり方で

きみたちは描くのだ

ベッドのなかのおとぎばなし

それでいいだろう

香を焚いて

鼻いっばいに吸おう

どこへ帰っていくために

ゆっくりとくゆらして

青い布きれがひとひら

窓へ

落ちていくたのしさ

黄の点滅信号よ

さみしいだろう

だれも注意してくれないどころか

だれもおまえを通らない

でもそれがどうしたっていうのか

秒針はとうとう消えてしまった

遅れてきたぼくのために

あの子はほほえみ

夜のおわりへ送られる

けつきよく

かわいければだれだっていいのさ

おねがだから

手をあげてごらん

毒蛇のようなかれらの

すこやかさをねがって

おやすみ

白かったり、灰だったり

夢のあいだに雲がはさまっていて

とても視界がわるい

あの色は白かったり、灰だったりで

おれの気分をいつも揺さぶる

いつかの夜

ぼくは女の子を轢いた

近所の商店に棲む十六才だった

慌ててぼくは隠蔽を謀り

あの子を車に押し込めた

でも深夜に生き返ってしまい、

ぼくはかの女を送り届けた

なにも憶えてないあの子だったから

お咎めもなかったけれど

けつきよくはみな夢のなかのことで

おれは悪くないし

あんただってそうだ

あるいはいま見えない雲のなかを

もがいてるかも知れないんだぜ

あるとき

ぼくはあのひとの手を握らなかった

握れば死んでしまうのだから

白い着物の向こうにかの女が

なにを隠していたかは知らない

ただあの殺人のあと

ぼくは走って

かの女も追いかけて

未練をふり棄てようとしていたのだ

けつきよくはみな夢のことで
なにも起ってはいない
あんただってそうだろう
だれかの体温のまぼろしに
惑わされてるかも知れないんだぜ
けれどもおれは酔ってるんじゃない
醒めかけた目のなかで
味わってるだけだ

ある朝

おもいかえしていた
かの女の撃った弾や
かの女を撃ったぼくの弾を
荒い呼吸と倒れる殺人犯に
戸惑いながらも手錠を掛けた
手に残るあたたかさや
かの女の生死にも

夢のあいだに雲がはさまっていて

とても視界がわるい

あの色は白かったり、灰だったりで

おれの気分をいつも揺さぶる

夢のなかで好きだったあの女たちは

現実のなかでは煙になって

おれの眼も口もふさいでしまう

光りについての短詩篇

*

光が光りを失えば

もう歩かなくとも済むだろう

闇が闇を失えば

しゃべらなくとも済むだろう

光はいつも道を指し

闇はことばを誘いだして

ぼくを孤りにしてしまふ

きょうまで光りから遁れ

昏さからも遁れて来た

けれどももうおもてへでてあの流れに入る

*

ほら、きみのすぐそばを

群れのたくさんが急ぐ

ソーダ水を片手にひとりの青年が立ってる

だれからも遠く愛されない青年が

壇を日ざかりにかざし光りを閉じ込めては

一息に呑んでしまった

声をかけようとしたけれど

道の決まっているものはふりむかない

きみは石そっくりの陰部を砕き

古いことばを棄てようとしてる

*

それらが内ちにとどまるよう

願ってもみなければ

叶わないのだ

水に溶けるのを見るのみで

あなたは朽ちかけの壁に背を赦し

ゆうぐれを浴びてゐましたね

腐った野苺と野犬の吠え声のなかを

ふたりだけで立ってゐた

「あなたは光と翳のゆくえを知りたい？」

ちようと夕べが林のなかにあつて

赤いまなざしがこっちを向いたときだった

あなたはかみ合わない視線でと息して

「わたしはあなたの姉でも妹でもあるのよ

つまりあなたの存在のひとつの紙片でもあるの」

そうささやいた

ぼくには姉も妹もいなかったのに

兄や弟がいたかも知れないのに

ただうなずいて

夜が来るのを待ってゐた

いったいなにが云いたいのだ

少し苛立ち

少し笑み

夜の深みを待ってゐた

ゆうぐれが終わったころ

互いの沈黙のなかで死のおとが鳴った

満たされない景色のうえで

あなたはぼくを通し

あなた自身に語りかける

「どんな日没もどんな日の出も

きみの孤独を反映したりはしないだろう

か細い光りが胸のあたりに

ただ刺さるだけ——」。

そこで光りは落ちた

*

風が頬を撫ぜると 笛の子供たちがいっせいに舌をだす ある正午ぼくは光りのない燈をもぎとりながら夜を待ってゐた 道を次第に町へ入る 高架路の足首 車たちの手術室 医者のための洋食屋 無人給油所の破れた管 そのなかに芽吹いたもの 六月の日のなかで不正は早くも凍死する 私鉄T駅からA警察署へ 知らないひとびとに挨拶をくれながら少年は取り残される おれはなにも知らないんだ 青と黄の世界しか ソーダ水を飲み干してあなたは群れのなかへ消える ああ そろそろぼくもいなくなっちゃ 藍色のテントハウスが空腹を告げる 国道を過ぎると大きな象! 臭気を放つステンレス製の和式便所 そのうらで休息する にせものの雷鳴を乗せて長距離輸送のトラックの走る ぼくが追求するのは不正ではない 色と輪郭の張り合わせ 百足の行進 異人が農夫を嘲り 笑って畑に唾をたれてる 病院通りの狭路 そこで連れ去られた少女たち ぼくはとうとう太陽に覆いをかけた

*

閉じられた戸口にかけはふかく

行と行のあいだを伝い

ことばに沁みてゆく夜半

かれらはその室にあって

ひどく怯えてゐた

消えた灯りのもとをさ迷い

書かれたあとの

読まれたあとの景色を見つめてる

まあ、かわいらしい児！

あのひとは黄色い手をまっすぐ展ばしたけれど

そのために死んでしまった

どうしたことだろう

この夜つよいレモンの匂いがぼくの目を醒まさせた

まるで詩人のようだと

ひとりごちて窓をみたが

写つてゐたのはだれかの幽霊

ああ言葉を憶えてしまつては逃げ場などないのさ

なにをどう書いたって

だれかを傷つけ愛してしまう

白いノートのうえに鼻を撫ぜる匂い

それはまぐそのかも知れないし

苺のかも知れない

雨季のとかげの

あるいはインクのかも知れない

ぼくは詩を書いた

笛の子供らがいつせいに舌をだす

かれらが追求するのは不正ではない

色と輪郭の張り合わせ

ぼくはあなたを通してぼく自身に語りかける

光が光りを失えば

もう歩かなくとも済むだろう

闇が闇を失えば

しゃべらなくとも済むだろう

だからおまえよ、眼も足も手放せと

ぼくは聞えないふりをして少し苛立ち

少し笑んで朝を待ってゐた

そこへ戸はひらかれて

だれかの言葉が

だれかを殺し終えて立ってゐる
ぼくもあのひとのように青い手を展ばした

*

雨季の象形

*

雨の午後はいつも

水たまりが駅舎の霊をはらみ

待ち人のいくらかを連れ去つてゐく

きみの冷めた腕がいくら引き戻そうとしても

たぶんかげでしかない

灯りを整えながらも敵のかれらはきみに棲んでゐる

背から周囲を監視して

夜は眼に移住

暗がりに待ち人を映しだし

地平線もない夢のなかできみはみてる

さあおまえも来いよ

ねえ来いつたら

かれらの声は高く

きみのひとつひとつへ呼びかける

*

ぼくが問いかけるとそのひとは顔を白くさせた

彼女はぼくを待つてゐたはずなのに

たがいに会いたかつたはずなのに

まるで知らないだれのような眼で

しばらくぼくを見ると

はずれ調子の時計をはずし

水たまりに消えた

黒い影は一瞬ぼくを噛み

青い波紋を描く

かれらはいつも狙つてゐたのだ

駅前のいびつな道や

すきまだらけの時刻を

よそものの横顔や

溜め息のたかまりを

かれらは雨水で身を清め

十月の米を研ぐ

かれらは雨水で酒を造り

六月の夕を誘う

きれいな幽霊たちの笑いがして

広告塔の下でじつとぼくは見る

手をふってみた

*

ぼくはきみの夢を見たよ

水の向こうのなにかから

話をしてくれる夢を

きみはとかげを見たんだってね

窓枠に挟まれた雨季のとかげを

生と死のあいだに挟まれた哀れないつびき

かろうじて綻びをまぬかれた灰色が

巨きな雨粒のなかで熟み

次の巡回を待つてゐるのを

きみはいくんだってね

そのとかげをつかまえに

水の向こうではたくさんのひとが

待つことを忘れて愉しんでゐるらしい

悲しいのではない

寂しいのではない

ただなぜか口惜しい

きみはいくんだってね

*

もうじき夜が明ける

消し忘れの灯りがかれの背に見えた

雨のあとを光りのたぐいが跳ね

行方不明のひとつひとつを洗って

いなくなっただれかを捜す

かれの灯りはもう消えてしまうだろう

ぼくは苛立ちを胸に鳥を撃ち殺した

風にゆれて地面が

視界をさえぎり

視界をさええる

ぼくは雨水で鳥を清め

六月に霽を引く

しかし水たまりは閉じてゐて

ぼくを連れ去るものはゐない

敵はもうすいみんへとなだれ

駅舎はもとのまま

ふたたび幽霊は死に

気温の上昇が速く

汗に頬が濡れる

*

太った聖者

たくさんの夜を踏み

救いあげるべきなにを探していた

黒い点のあつまりとかさなりをよけ

旧国道のしずまりを歩く

なにかに奪われたくて

なにかを奪いたくて

やわらかいカーヴに乗って

手のひらが足もとへ落ちる

たやすい慰みが欲しくて

小さな秋めがけて

求めるものはあっても

信じるものはなく

閉じた門口に立っては

だれもない庭にペールの女を見ようとした
こころのうちでかの女をひどく犯しながら

救いあげるべきなにをぼくは見つけられない

駅の裏道をたぐり寄せて

ひとりだれかを欲したが

降りてきたのはとても太った聖者で

薄暗い笑みのなかで手のひらを差しだした

なにももってないぼくは

かれの過ぎるのをちっと待っていた

これだけをぼくは願う

木のようなひと

あるいは人のような木が見たいと

不在の梯子

不在の梯子を揺さぶりつづける

永く

ただながく

うえにはだれもいないのに

だれもいないからこそ

おくびようときみしさを

佇んでゆさぶるのだ

呼ぶもののないところ

ふり返るひとのいないとき

恥ずかしい身のうちを青い天板に語る

知っていることも持っているものもなく

午後のなかでひとりのみの悪態をつくだけ

死んでいったやつらへ

遠ざかっていったひとたちへただ毒を吐く

もうぼくが愛するのは止まっているものだけだ

朽ちかけの家並みに草むらの遊技場

忘れられたままのいつびきに悲しいまでの一台

それらを打ち毀しながら愛し

よりよい位置を探すのだ

さわがしく気のふれた連中を遠ざけて

しかしきょうの夕ぐれどき

ぼくはとうとう梯子を引き倒した

草むらに葬って花を散らしてやれば

どこからかざまあみろと声がする

そこをかぎりない悪態も疲れはてて

椅子もない室のなかぼくはひとり眠っていた

(それでも明日になれば梯子はふたたび青い天板へかかつてあるだろうか)

ふたたび去っていくものは

少しずつひらかれるまなこを

ふたたび去っていくものは

手のひらへ

あるいは風のなかへ落ち

現れてくるのは青と黄の格子

二月のかもめがゆつくりとかすめ

あらたな軌道を知らず

これが朝なのか夜なのかもわからず

きゆうにかれが立ちあがると

見知らぬひとびとが火種を口に含み

ただ歩いていくのが目撃された

うそをふりまきながらかれは高原地帯の故郷を過ぎ

なにかをふりむいてだれかをくり返す

まぐその匂いを寒さに嗅ぎ

冬の街へ少しずつ病や酒とともにでていくのだろう

いま閉じられるまなこを

ふたたび去つていくものよ

あるいは風のなかへ落ち

またしても都市への密航を企てるものよ

青と黄の格子のまえでぼくは口笛を鳴らす

なにもいわないで

2009

天皇誕生日

花のない

金のない

十二月の午後をおれ

は歩く

立小便や

露店の男たち

をぬけて明るい駅のほうへ

緑色の天使たちや

枯色のどろぼうたち

死の染みこんだ靴の

音ともに

おれは朽ちかけた最後の戦後詩人だ

そして使用済みのおむつそのもの

怒りは鳩のように逃げ惑って

愁いは水のようにまわりがはやい

なにもできなくなるまえに戸口をいっばいに啓くのだ

だれが思っているよりも狂気は

静かで淡い

気づいたころにはすべて

まみれている

くそをもらした子供そっくりに

みんな廊下に立っているのだ

おれにはできることがない

それだけのことだ

最後の百円を引きだそうと

銀行を訪れる

すると本日は小銭の取扱いはなし

あのひとのよさそうな爺いめ

その担ぎ手どもめ

なんてことをしやがるんだ

塩焼きにされちまえ

おれならそこに

おろしぼんず

を見舞ってやる

2010

いかれた教会のスケッチ

白い壁のうえに

血のように赤い十字架がそそりたち

救いの惹句がいたるところに張り巡らせている

窓ひとつない巨きな鉄扉があらゆる悪党を拒み

ふらりと来た犬でさえも

それを畏れて去る

物語からはぐれたおれはそいつのまえに佇み

胃酸に苦しみながら眺めてる

ピラには強盗だった男が刑務所で改心したという噺

キリストは大悪党も創り返る（原文ママ）

とんだ現世利益だ

おれもあずかりたい

なんでもそいつは入れ墨野郎も染めあげ、

出所後は牧師となって警察署長の娘をものにしたらしい

なんて効力なんだ！

しかし信仰の木杵のなかでは

どんなことにだってつじつまがあい、

原理を解き明かすことができる

精神分析とおなじで

こんなものは白んぼのおためごかし

信じるものこそ救われない

スピーカーは終日宣伝をまき散らし

惹句まみれの車が歌をがちわめき

老いた尼僧だけがしずかに通りを歩く

それらに救いはなく、

この土地にもなく、

そして

おれには？

解体される城のスケッチ

午、

駅前の

小雨のなか

うめきを発して

娯楽施設が毀されている

内部をゆっくり崩していき

いまは外壁だけが静かに立つフェスティバルゲート

一見そのままでありながら

いまやはじめて朗読をやった

あの喫茶店もなく

地階のコンビニエンスストアさえも

軒を閉じていた

あのとぎデザインしたポスターもパンフレットも

フェスティバルゲート解体に寄せて

撮影した写真も使ったsumena08も

かけた音楽も出会ったひとびとの行方も

いまでは彼方だ

なにひとつ現在につながるものはない

あのあとおれは田舎のジャズバーで

5回ほど読んで朗読をやめた

もっとやっておけばよかったとおもう

デザインだってもっとやっておけばよかったとおもう

いやほんとうによかったのか？

結局はのぼせあがっただけだろうな

あそこの女詩人が憲法を吹き込んで売っていたっけ

イデオロギーに脳を吸い尽くされたひとびとが

それを讃え、褒めあっていた

おお痛ましい光景よ

おれはそいつをおもいいだしながらタイピングにいく

半時間¥200で

願うことなら

おれがやったことも

かれらがやったことも

解体されつくして

おくれだ

さらば

さらば

門番

雨がもつとも黒い降りかたで

町に来る

犬どもは小屋に遁れた

室をもたないやつらは

職業安定所のひさしを傘に

ひとつひとつちがった柩をして

眠りのなかへ

両の眼を見放く

通りの灯火はそれが白く揺れるたびに

どこから悲しい怒り声があがった

おまわりと

気のふれた男とが

踊っているのだ

どやの窓がらすにくるまれて聴きながら

そのステップにあわせてますをかく

使い古されたねたで

もしもあんたが望むなら

見たこともない扉が立ち上がるときを

教えてやってもいいぜ

こんこんと眠りつづけるなかで

耳に告げようか

その扉は夜に立ち上がる

ルンペンたちの罅のあいまに

すつくりと立って

幻しを見るものにそっとひらかせる

でもおれだってまだひらいたことはない

おれにはまだ幻しが足りないんだ

あれはいつもちがった色をして

幻視者のまえに現れるのだ

燃えの残った狐火まがいに

ビルの高いところから

空白が見下ろしてる

おれはそつと扉からはなれて

どやに退き帰した

おじけづちまっただ

そうでなくとも

迷っているうちに

朝が来てふいしてしまふ

そいつが来なければおれはどこかへいけたかも知れないのにな

寒風のなかで正体を失い

呪詛軋めく狂漢たち

気がつくとおれは

ふたたびどやに

いた

その正后おれはみた

ぼろになった男を

穢れたなりをして

左手には首飾り

右手にはビニール袋

背中にはかれが忘れてしまっただろうかれのなまえ

火を通ってきたような色彩をして

長い毛のなかで幻しを見ていた

路上に同化しようとするかれに若い女がちかよって

なにもいわないままに

食いものを食べさせてやる

おれは秘儀を見るように見えていて

身体が温くなった

いまごろかれは扉のまえで

番をしているにちがいない

あしたにはきつとおれも

その扉をひらくだろう

ぼくよ、みずからの詩でみずからのくそをぬぐえ

ぼくの詩で

ぼくのくそをぬぐえよ

だれからも拒まれて

なにかからも遠ざかりながら

まだ青年の手を使って

売りものにならない紙束を

便所のなかでぐしゃぐしゃにして

ふきやすいように加工していく

終わってしまったのだ

かつて才能があるとか

品があるとか

おだてられましたが

ぼくが生きたのは長いほら話

美しくも

珍しくもない

たかりやの乞食の日々だ

雨に溶けかかった聖母像も

夜の庭に立つベールの女も

むせかえるような地獄も

素手で死に触れるうめきも

ここにはない

あるのは塵のような男たち

たとえば立ち小便の男

廃家電を路上でばらす男

ごみに値札をつけて売る男

スーパー玉出に屯する男

薬を売りつける男

使用済みの女を売る男

どやにも泊まれない男

どうにもならない男

どこへもいけない男

どれもこれもだめにしてしまう男
老いてしまっただけの男
女のいたこともない男
なにをやってもだめな男
友達のいない男
立ってるだけの男
立ちながら眠る男
詩を書いてるふりをする男
詩を書いてるふりをする唇のお厚い男
幼児体験から抜けだせない男
すきさえあればひとにすがりつく男
だれかにとりつこうとしか考えない男
それでも仲良しこよしが大きらいな男
それでも認められたい男
やっぱり認められたくない男
ただのりの男
まともに働けない男
説明ができない男

どもりを治さない男

猫背を治せない男

みずから疎外を欲しがってる男

遠回しに師弟関係を解消された男

反省文だけは饒舌な男

タイプミスを直さない男

永劫回帰に甘えてる男

すべてに甘ったれてる男

家族とうまくいかなかった男

社会ともうまくいかなかった男

なにもいわない男

おまんこしたくてしょうがない男

ありふれた狂気にさらされてる男

凋れきった花のような男

じぶんはいい立場におかれてしかるべきだと根拠なくおもう男

異郷の貧窮院に入れられてそこでも詩を書いている愚かな男

そろそろ夢のおわりを感じ始めた男

なにもかもに気づくのが遅すぎた男

酒が呑みたくて実は我慢できない男
じぶんの優位性をなんとしてでも見つけたい男
優位性がどこにも見つからなかった男
阪堺電車の軌道を眺めるだけの男
みずからを肯定するだけの男
みずからを否定するだけの男
絵を描く男
絵を描くふりをする男
ピアノとやるふりをする男
読めもしない本を抱える男
未来のあるふりをしてる男
生きるのをあきらめてる男
アル中の男
見栄をはる男
うそをつく男
いいわけをやめない男
ひととき反省する男
屁理屈の止まらない男

まちがいをあつきり認める男

それでもほんとうは反省してない男

じぶんがわかってるつもり男

うまくできるつもり男

ひとをだしぬけるつもり男

だれかを魅了できるつもり男

だれかを見捨ててるつもり男

おのれを見捨ててるつもり男

だにも信じてない男

孤立を才能と勘違いしてる男

虚無に喰われつつある男

みずからをずたずたにして悦に浸ってる男

喰うためなら盗みだつてする男

尊厳などほど遠い男

古事記を読む男

落書きを売りつける男

自己完結してる男

気持ちわるい男

かっこつける男

なにがあってもかっこつけてる男

でも下着は数ヶ月も洗濯してない男

そして詩を書いている男

立ちあがるときにはすべてがおわってる男

地方詩誌にくずみたくない詩を押し売りする男

十二歳ですでにクラスの女子から人生終わってると宣告っされてた男

好きな女にはことごとく癩病菌扱いされてた男

昔の体験から見えないところでがんじがらめの男

だれも仲間などいなかったし、つくろうともしなかった男

始まってもなかったといまさら気づく哀れな男

つくづく知能の足りない男

この年で計算もろくにできない男

教養のあるふりをしつづける男

この齢でドストエフスキーも読んでない男

いつまでもブコウスキーをしゃぶってる男

帽子をかぶる男

帽子をかぶったままの男

じつは禿げてきた男

現実を見失ってる男

便所のなかへ入る男

汚れた便坐を睨みつける男

他人のしょんべんで手を汚す男

だれもないのを確かめてから悪態をつく男

そうしてズボンを降ろす男

そうして坐る男

そうしてふんばる男

肛門になかなかちからの入らない男

ようやくそが出始める男

そんな男がここにいる

ぼくはぼくの詩で臀の穴をぬぐうべきだ

そしてこんなことは終わりにしよう

さて来週からは倉庫係にでももどるとしよう

これはその予告篇だ

ぼくよ

もたざるもの、おきざられたもの

もたざるもの、

おきざられたもの

スーパーマーケットに入れず

自販機のまえに立つもの

それが聖なるものかのように

石に触れるひと

電柱のかげはまほろば

犬たちは敵を求めてさまよい

ぼくは灯りのしたでふるえる

公園に眠る男たち

浴室で死ぬ女たち

家なしたちの家

段ボールのなかで息をするものたち

売れるものは売りつくしてしまったものたち

語りかけるときを待っているものたち

話しかけられるのを夢想しているものたち

歩道で尿するものたち

それぞれ賭けるものをもたず

生みだすものをもたず

朝を求めて

吐く息の奏でる

音楽たち

語ることをもたず

交わす手をもたず

これまでにないものも来なかった

これまでのおのれを呵むほかには

どこかの室で人間ではないものが

戸をあけて入り、

灯りを点すのを

待っている、

夜

ピアノを挟じ開ける男たちのまえで

午后

路のうえ

ピアノを挟じ開ける男たちのまえで

おれは古事記を読んでいる

御開帳よろしく天板をあけたピアノが

歩道の脇にうち棄てられ

乞食の男たちによって犯されている

ピアノ線が風に触れ

悲しい、

まったく無意味で

不条理な旋律を奏でるのを聴きながら

おれは天の岩戸の場面に来る

盤面はきのうの雨に濡れ

いやらしく光ってる

天照はわれ関せずな

光りをおれたちに

そそぎ、

おれの世界はもうじき

二時半を迎える

ピアノは死にかかっている

美しい蛇に美しい石を振り下ろせ

真昼から

墓場を散歩していると

蛇を見つけた

まぎれもない毒蛇

でも通報なんざしない

かの女はひとよりも美しいから

たとえ醜いがきどもがどうなっただって

知りっこない

ぼくが口笛を吹くと

すばやくふりむいてくれる

なにしてんだい？

たぶんあなたとおなじ

もてあました悪意を

どこかへ注ぎ込みたいのか
その通りよ

でも

ぼくにはしないでおくれよ

約束はできないわ

あなたは美しい、

そんなこというなんて

すぎないとおもうがな

ひとびとはそうやって

すぐにほめそやかす

でもこの世は虚無よ

なにもありはしないの

ただ色と形があつて

そう見えるだけ

そんなところで

愉しんだり苦しんだりするなんて

くだらない

死と生はおたがいに

なまぐさいだけなのよ

わたしはだれとも仲良くする気はないの

かの女の足がぼくの足にからみつこうとする

そのときだった

ぼくは美しい石をみつけて

にやりとする

とんだご高説だ

それならここで殺されても

拒むまい

お願い、やめて！

石を拾って

かの女のあたまを潰した

ぼくは笑いながら

墓にもたれ

マッチを擦る

すると墓がいう

おまえ、いますぐ

墓穴に入る気はねえか？

天使のいざこざにまきこまれたあわれな泥棒たちへ捧ぐ

かれらの羽がきれいだろうが

かれらの臀がいかしてようが

ぼくには興味のないことだ

安宿街に吹き流されたきみたちのかけが

黒いふちなし帽子が

どんな哀歌を奏でるか

どう踏みにじられるか

をぼくは見たい

でも現実には

なんの音も

色もない

孤絶があるだけなのだろう

ぼくはともかく

ほんとうに穢れたものからしか

ほんとうの美しさを受けとることができない。

墓場のなかでおれは涙をかんだ

夕暮れを

阿倍野図書館から

持ち帰ろうと

こっそり

墓場を通る

そのとき

小屋掛け禁止の立看板

そのまえに老人が鞆を抱いて

坐っていた

帽子のなかで蔓草がからみ

ひび割れた皮膚がかさこそと鳴る

かれは震えのなかで

空中に描いていた

産まれた場所

出会いたかったひとびと

建てたかった家

育てたかった子供

書きたかった物語

起らなかったすべてのことを

ひとさし指にまかせて

おれは泣きそうになったから

夕暮れをとりだし

その雲で

涙をかんだ

老人は落日のなかで

立ちあがり

ひとりでに燃え

ひとりでに燃えつくされた

でるところも入るところもない場所から絵が産まれようとしてる

おそろくもう

四〇をすぎたんだろう

かれはもともと絵が好きではなかった

ただまわりがおだてるから

そうおもっていただけだ

貧区のかぜに

文なしのまま打たれて

かれはありえたかも知れないときについて

脳みそを遊ばせる

夏は終わっていた

秋もだ

いまは冬だというのに

かれにはいくところも

もどっていくところもない

なにもかもみずから毀してしまっていた

まったくの自業自得だ

もう走ることはおろか

歩くこともできないなんて

考えたくもないな

避難所の締め切りは終わって

いきつくのは慈善家のくれる毛布のなか

職安のまえにへたりこんで

人生を探す

そんなものはない

車どもの発する光線が

まるくなったり四角くなったり

しながら冷たく眼のうちをいぶす

いまこそ絵を描くべきだ

金になる、きれいな絵を描くんだ

そうおもってかれはノートをひらいた

そこには詩のような

たわごとがならんでいる

そこへ理想の女

理想の室

理想の食卓

理想の照明

理想の本棚を描いていく

そのうちたまたまなくなつたかれは

その絵に入り込もうとする

まず指でしっかり左右を押さえ

右足を突っ込んだ

でもそこでおわりだった

紙は破けちって

かれは狂気にすら

取り残され

夜がすつかり

被い尽くす

めでたし、めでたし

開けゴマー——わたしはでていきたい
スタニスラス・ジェジー講師

おれだって

そうしたい

ジャツクの赤い靴下

自称ジャツクという老人ときのうであった

駅のまえで罐ビールを呑んでいるかれは

どうしてだかおれに声をかけてきた

かれはもう七〇を超えていて

しかしからだはしっかりしている

おれよりも背は高い

昔はボクサーだったらしく

その顔は赤木圭一郎に喩えられ

実際赤木とおなじ歳らしい

赤木は紅の拳銃をふっばなして

抜き打ちの竜と呼ばれながら

ゴーカートで激突死だ

ほとんどかれがなにを喋っているのかわからないほどに

酔っ払ったジャックとおれは話した

それでも詩なんかより

こっつちのほうが本来の意味で詩だ

パチンコ屋から吐きだされたあほどもが

立川の改札へとなだれていく

ジャックは黒い作業長靴から足をだして

赤い靴下を見せつける

どうだ、しゃれてるだろうって

おれはうなずきながら

かれが酒を奢ってくれないかと

待ちかまえている

しかしいつこうにそうならない

かれの話はボクシングややくざやストリップに流れ

終戦や空襲に落ち込んでった

おれが去りどきを探していると、

かれは長靴に足を入れた

そのとたん叫びだした

ウオooooooooooooooooooooo!

長靴のなかからかれの足と

一匹の蜂が飛びだす

夕餉を急ぐ群れが顔をこちらへむける

こつちを見るんじやねえ！

ジャツクは怒鳴る

かれはナイフをだして

刺されたところへふりおろし、

ぼれは慌てて血をよけた

土曜日

土曜日、

それは灰がかった不発弾

うずたかくされて長い年をおいたものごと

借りた金が

くすねてきた黒い上着が

おれを仮虚にした女たちが

まやかしまみれの夢が

不滅へのあくがれが

おれをくるんでいる薄い外皮を滲るがままに
する

土曜日、

あきらかな退廃をおれは撰びだしたい

ふみしだく晩夏は女のよう

裏通りの犬たち

なまえのついたかげ

裸のままに走る公園の子供たち

土埃を浴みている真昼のよっぱらい

トイレツトスターと呼ばれる

白い青年たち

かれらが娘であつたら

よかつたのに

土曜日、

救貧院の屋上ではためくものを見ながら

あざやかな飛躍をおれは描きたい

つぎにゆくところも

もはやもどつてゆくところもないひとたちのなかで

歌つてやるとしたら

なにが歌えるか

ふいに砲声がぶちあがる

それはもぐりのノミ屋だった
たてこもる男たちにおまわりが
鉄壁をやぶって突っこむ
しおれた花のように年寄りたち
そこから偶然をとりあげて
必然へ連れ戻していった

土曜日

月曜日

月曜日は生ごみが降って来る

木賃宿のむこうがわで

ぬるんだかぜがふきつけ

ひとが吠えてから

いぬが吠える

降ろしたままの日よけ

うすくらがりのなか

裸をむきだしにして詩

を書いていたら隣室

から悲しい呻き声だ

すぐさま老夫たちが

それを救いだす

掃除機とまぐわろうとした男を

しそんじた生きかたと

穢らわしいハモニカを

胸のうちにしゃくりあげ

おれは蒲団をかぶりなおした

そして詩を放棄してしまふ

朝は羽根をもぎとられようとしながらも

飛んでいくみどりのからすだ

窓の割れまから

数百の蚊がじきに

口づけしようとしてやってくる

さあ来い

詩と蚊の関係についての序説

十二月になってもまだ

蚊がいる

かつて死にかけたかれらを題材に

短歌のなかで哀れんだが

そんなものはきぎなだけだった

羽音を聞きながら

眠れない夜を過ごす

おもいだすのはだれかの詩句

夜は本を読み

冬は西へ向かう

今年は屋根があるだけでもましな冬

蚊は何周もおれのあたまを飛び

そのたびにおれは詩をやめようと

おもいながら書く

ずいぶんまえにやった

夜勤のモニター監視業務を

こいつはおもいださせる

午後5時からはじまって

翌朝の9時過ぎまで

眼をあげっぱなし

退屈と疲労のなかで

1分ごとにおれは

やめてやる

と考えてた

蚊はどこかへいなくなる

もしかしたらくたばったのかも知れない

あるいは休息のおともに

おれを噛っているのかもな

わずか週五〇〇円で詩が書けないときの過ごし方を教えます

詩が書けない日

緑色をした天使たちの

かたわらでインドの葎を吸う

ぼくは往来するときの残り火だ

そして削りかす

物語のおわりに

詩が始まろうと立ちあがる

警笛が鳴ったほうへふりむき

ぼくも立ちあがる

そろそろいかなくは

広告ビラの少女たちで

荏火を消す

かつて人間だったものの

魂しいを燃やしなが

おお、なんとはかないものごとよ

おお、なんと美しい灰と塵よ

おれは又エ

死んだふりをしていて

ほんとうに死んでしまったのはおれか猫か

あけっぴろげのめだまに虫は来て

曰くもう秋だ

とのこと

病むような暑さを

ささえるような音とひと

話し声はひからびてしまっている

だれかがなまえをつけてやらないと

だれもその存ることに気づかない

たとえばペスト

たとえばナナフシ

たとえば急性膵臓炎

おれはおれのなまえをくれてやる

どこまでいっても眼のなかは青い

おれは又エ

生死不明

老人のぼく

八月末日

すれちがうところにひとびとは生きている

夜に光りが来るのでなく

光りに夜が来るのだ

黒い帽子と上着をして秒針をくぐりぬけるけものたち

そのうしろ姿を靴のさきが描きだす

もうじき降りてくるだろう季節

秋にそなえた憂いだ

環状線のまるのなかで

ぼくはふみつける

多くの過ぎたもの

訪れようとするものを

古びた犯罪小説のように

ちよいと悲しみを含ませて

ばらばらにくだいてやる

どこかで軌道が泣き

月が緞帳に失せ

しわだらけになった老人のぼくが

こそりと自販機のかげにあらわれた

2011

深夜

亡霊は台所に現れる

ぼくの双子のように

冷たいれもんの色と香り

だれもいなくなった室に立っている

そこへ現れるぼくのかげはきつと

なにも喋らないだろう

穏やかな青い姿を見せて

ときおり笑うのだ

おそらく、

ぼくらはまぼろしにすぎない

小さな鼓動のなかをさ迷っているにすぎない

古ぼけた電灯のもとにかたまつて

おたがいの眼を合わす

そのとき見えるのは

たぶん緑の天使たち

かれらはなにも示さない

戯れているだけさ

求めるようにそのうちへ入っていき、

片方は右へ

もう片方は左へ

夜の神聖さに触れようとして

よわくつまづく

くちかけた路にぼくは立っているのだ

大いなる朝を待ちながら

貧しいものたち

気のふれたものたちと

口笛の、

ではなく

ふるえの旋律によって

声のないまま歌いながら

ここにぼくらは立っているのだ

みずから嘔きだしてしまったものや

ひりだしたもの、

くずしてしまったものの中に

歌は宿っている

古びて値いを喪った青銅の硬貨のように
ぼくらはぼくらを転がして
かすかな毒気のなかを
だれにも知れないように
歩き始めている

雨季

ほんの少しの憂さのためだけにぼくは

おれは酒を呑んできた

かぜのなかを迷子になった子供たちが

赤いくちびるを結んで

遠くのほうへ

駈けてゆく

駈けてゆく

とうの昔しにちちんでしまったぼくの脳神経に

おれはふたたび囁きかける

存在しないものを探すんだと

ぬれそぼつ不法投棄のごみども

毀れ果てたガットギターの精霊のような、

女がひとりそれを漁っている

ぼくはおれは酒をやめて

それを見ている

あの存在のなかでいま、

はじけようとしているものがきつと、

ぼくのおれのあたらしい詩だ

雲のさけめにきれいな、

球体がまぎれこむ、

夜だ

燃え殻

塵が訪れては

去ってゆく

町のたもとから流れ落ちて

ぼくのもとをさってゆく

見も知らない恋人たちよ

信じておくれ

ぼくにはなにもないのだ

たわごとを陽に曝すしか

用のない男なのだ

たにもない両の手で

言葉を掬い返しては

だれもいない路次に

去ってゆく

どこにぼくの語る場所があるう
つねにひとつの火が燃え
胸の灰のなかで燻っていた
ぼくは燃え殻だ
美しいものごとをおもい、
泥のなかで臥所を求めている
自己の苦痛をただ信じ、
背骨を笑わせる
ひとりひとりの
光りを追いながら
うら若い戒めに潜ってゆく
ぼくはひとつきりの燃え殻だ
かげは向きを変えて離れていった
塵のようになってぼくは町を離れるだろう

無名

朝はうら若い

戒めのとき

孤りきりれもんを撫でて

無名の息づきを聴く

そしてしっかりと

噛みつぶすのだ

ぼくはよそもの

かつて暮らしていた

ごみ箱のうえで

いまは牝猫がいる

かの女は半分

ぼくの生まれかわりにちがいない

ぼくは小説家になろうかとおもった。

夜遅く

窓づたいにネオンがやってくる

とてもいやらしい色をして

ぼくの蒲団をめくる

女のいないやつは

人間でないものに

女を見いだすしかない

ぼくは七色に羽撃く鳥のつばさに

ぼくの魂しいをあづけた

翌朝

だれもいない裏通り

だれかのげろを鳥が啄んでいて

裏町の物語

その仕組について

鳥語で明かしていた

ぼくはかげという通訳をつかい

おぼろげながら意味をとる

虚無の殺されたあたりを

ゆっくりと歩き

ぼくは小説家になろうかとおもった

灯りがついていたって人間の室とはかぎらない。

2012

象（即興）

とても日曜日らしいことに

だれもが象がほしいというのでくれてやった

なるたけおおきなのを裏庭に連れてきて

かれの好きにさせておく

でもひとびとといえば

だれもがそれを自分用にしがった

隣家の老婦人はながい鼻を欲したし

うえの階の女づれはどうしても左足がいるそうだ

路次のルンペンは背中を毛布にしたいといいはり

郵便屋の若い女は前足を一そろいで室に入れるとわめいた

少年は耳をかたっぽうでもといい

少女はしっぽが宝ものになると笑う

運んできた男たちは笑わない

配送車輛を箒にかけて

なにも見ない

そこにアパートの管理人がわって来た

この裏庭にあるということはすべて

あたしのものといった

かの女はなんらかのやり口によって除かれた

隣室の家族づれは象がわれわれの神とほたえる

じきにしびれをきらした階下の学生どもが

大工の老夫をつれてきた

かれには本棚をつくってもらったことがあった

老夫は墨でしるしをつけて切りはじめる

しかし象はなんともしない

とにかくけだるそうで声もあげない

まっすぐにこちらをみてる

でもなにもできなかつた

とにかくひとびとは象が欲しいのだから

それのはかになにか理由はいらぬ

室にもどって作業のおとだけを聞く

きつとあと数時間で象はみんなものだ

あくまでかつて象だったものが

われわれをしあわせにする

ほんものにはできない

芸当だ

わたしは電話をかける

それでだれかにいう

つぎは馬にしようとおもうんだ。どうかな？

いいんじゃないか。でも――

でも？

首はおれにくれよな。娘が好きなんだ。

さっそく檻を用意してくれな

だれかはわからない

でもこのようなことを話した

おぼえてる

それでいまわたしがその檻のなかにいるんだ

わたしのどこが欲しい？

おれは駐車場が好きだ

夜も更けてきたから

ガス・スタンドで

小便をすます男

マーケットで

罐詰をくすねるやつ

夜のネオン・サインがまたたくとき

だれかとだれかがまぐあいをはじめ

むつぎごととはとってもさもないこと

国道沿いの連れ込みで

たくさんの女たちと

男たちが笑みを交わす

そのとおりでだれだって幸運を歌いたい

でもそれは叶わないこと

ハイ・ビームが眼をくらまして

おれたちをさげざる

だれもいなくなった通り

猫どもが走り去って

小さな、

小さな変化の変わり

あざ笑っているんだよ

山がうごく

川がさかまく

町はゆるりと色を変え

ちがったものを買えとあたらしい広告を手渡す

くそくらえだ

おれはなにも手に入れたくはない

もうじき夜も明ける

ハタネズミと一時解雇

夜のうちでもっとも

好きなものだ

だれもいなくなった中古車売り場

車たちをみつめる

首をたれた広告塔の灯り

やつはいつまでうつむけたまんまなのか？

*

やがて犬たちが来た

またしても朝というやつ

手配師どもが笑い

おれの外套のうちに鳥籠がゆれる

立ってたらだれかが降ってきた

これはまた

ごくろうなこと

*

闇市で売られてた、

ストリップパーたちのポラロイド写真

踊りすぎてけつのはたれてきた女たち

それでもそれらがかの女らにとっての黄金時代

喪われたものはなにもない

けれど発見したもの

だってなに

もない

*

バスはやっては来ない

夜の三時で

その時間はたぶん運行されてない

でもかれにはなぜだかわからないのだ

それにあっちは停留所

なんかじゃない

どうしてこうなるのか？

おそらくただ待ってるのがよくなかったのだ

*

立ちあがれない空腹で、

おもいだすのは「空腹の技法」、そしてその著者

ポール・オースター、

でも読んじやない

立ちあがれないほどの空腹

なのに勃ちあがってくる

わが逸品

種の保存なんぞお呼びじゃない、なのになぜ？

しかたない——五回目だ！

*

しらふのときだっというのにおれ

は李白のまねをやる

みじかい詩篇

不眠のうちによみがえってくる笑い

不眠がばからしくなるくらいに愛おしい、

ポルノ動画のお嬢さん

かの女のなまえが知りたい

かの女のこと知りたい

下心？

そんなものはない

ただほんとうにやりたいだけだ

それだけは純粹

*

2013

火影

*

五月はいま

宿を喪ったおれたちの譬はなによりも美しい

花々の死など

くそくらえさ

*

火影はどれも

ばかばかしい調子で

順路にあらわれては

おそれのなかのもろもろ

にあるおれたちをあざける

緑の火が身体中を

よいどれのバスみせて行き来していき
手すりにもたれた女がこういう

あなたはなんにも

触れようとしな

ちぢこまって枯れている

のぞき屋な窓よ

ああまるで凶星だ

おれはまだ燃えている木枠に

うら若い戒めるときを見つけてはそこに発射した

おれはおまえに憎まれつつ

おまえを夜明けの都市に飾り立てて

懐かしい衣装とともに犯した

またおれは梱包されていくひとびとを

真昼の路のうえにばらまいた

またおれは濡れそぼつおれの詩情へ黒い犬の

燃えるようなくそを塗りこめた

おれはただ見ている
運ばれる品物がすべて柩に変わっても
なにもいわないで
ただバスに手をふる

*

ぼくは耳を閉ざして
短筒を握る
おおくの死に顔や
明けてゆく窓の
昏さや色、
きみの拒んでいる背中
をあきらめて
引き金は淡い
火薬は魂しいを燻す
それは空砲だった

*

ひとかけをたたんで
それを喪う

まわりはなくて

みじかい午後にぼくは

足で旅を穿つ

まぶちをたたむと

かたい眠りを喪う

風景にいらだち緑の火がちるちる

ぼくはそのほうに入って行って

この身を燃やしてみるんだ

*

未明のこと

雨がやってきて

*

バス停を濡らした
待つものはだれもいなかった

2014

三月

春雨は祝電を送る

ぼつ、ぼつ、と

いいながらずっと

前線がくたばるまではずっと

ずうっとだ

眠りたい

ダートレースに敗れた

レーシング・フォームで涙をぬぐい

両の手で両の眼を覆う男たち

どこにでもいて

どこにもいないかれらとの相関図をおもいえがきながら

わざとらしく背をむけて歩く

どうやら神に憑かれたみたいだ

十九歳からずっと

かの女はスカートの端をきつく握ってるんだ、いまもずっと
斃れないでと

叫びそうになりながら

でもどうやら助かりそうにない

撲たれるのはなれたはずじゃないの？

いや、という

沈黙や黙殺が怖いんだ

そいつがいちばんの敵なんだと

しかしかの女はあくまで手強い

ダートを死ぬまで走らせたがる

机のうえを眺め、ふるいミニカーを掴む

フォルクス・ワーゲンの1600TL

おもむろにそのドアをあける

ゆっくりとした動作で乗り込み

少し窓を袖でぬぐってから

慣れないその左ハンドル車を発進させた

墓場まで何マイル？

あんた次第よ

四月

信じることに蝕まれて埋もれる老人の横つつらをみて

大枚を叩いても買い取ることのできない鉢植えを

きみは窓から放り棄てては喜びに浸るんだ

なぜって？

それがきみの持つてるもので唯一のものだからさ

なぜって？

通りを歩く馬の嘶きが聴きたいがためにさ

きみはこの季節の意味を知ってるんだ

おれもこの季節の意味を知ってる

それで満足だろう？

充ち足りるんだらう？

風景はここままで終わらだ

おれのなかのかの女が遠くなる

すべてが価値のないものに埋もれて

それでもおれは窓から身を投げだせないまんまだ

解かれない忌引きに鉤づりになっちまって

もうどこにもいけやしない

そして退屈のアパートメントで

かの女の夢ばかりみてる

あの4月

最期に逢ってから14年だ

素直になりな

これはおれ自身のことなんだ

きみなんかいやしない

意味なんか知りはしない

放物線を描いて

ボールは公園を跳ねる

どうか幸せでいてくれよ

おれはしばらくここにいます

どうか幸せにいてくれよ

おれはもうもどれない

エリオットなんてくそくらえ

残酷な月には終わりなんてないんだよ、爺さん

どうかおれをあの4月へといかせてくれよ、エリオット爺さん
そしたら有り金叩いて鉢植えを買ってやるさ

五月 イエロー・マーケット

終夜営業の市場にて

みんながそれぞれのカートに乗って

天国のカリナー・ワーフへと赴く

そんな世界をおもってたんだ

じぶんにつけられた値札を申し訳なくおもいながら

たしかそんなにふるい話しじゃなかったはず

あの子がぼくに声をかけてくれたのは

エスカレータのまえでぼくもかの女もカートに乗って

でもこっちはやぼったいやつさ

世界がみなぼくに唾したって

あたりまえなありさまで

きみの笑顔に戸惑って

逃げて逃げて

レジスターを抜けた

あれからずいぶん大人になってしまった

贅肉を蓄えてだぼらを蒸留するやろうになりさがあった

もうきみに会えないのは悲しい

だけど会えたとしても

ぼくらはさみしい中古品だ

もうほんとうのものなんかどこにもありはしないんだよ

夜と午の歌

夜は忘却を強いて

午は憶えを強いてやまない

うす昏い室のうちでおれは脅える

どちらがわにも許容が利かない

山麓バイパスを走り抜ける天使たち

その群れに沿って歩き

ふいのむなしさに

泪ぐんでしまう

忘却も憶えも叶わずに

おれは夢見る、

舞台まじかの悪漢たちをだ

あるいは神戸港くんだりで

飢え死にすることやなんかを

鳥どもの祈り

鳥どもの祈りが

ゆっくりと寝台を濡らす

まるで玉葱を剥いたときの涙みたいに

しっとりとなめらかで

激しい

心性がだれとも通わなくなつて、

幾年もが経つた

しかしいまかれらが魂しいをあたらしいものにしてくれる

それは渴き切つた現実にやさしい

鳥どもの祈りは次第に夜めいてくる

そいつはネオンみたいに輝かしいけれども

裸電球みたいにつつましくもある

羽が揺れ、

嘴が囁くときだった
おれの心をちぎりとって、
かれらは飛び立ってしまい、
祈りもろとも、
みえなくなっただ。

なにかにむかって犬が吠えてる

ブルース・ウイリアムズ写真集「死ぬにはいい日だ ニューヨーク道路情報」に寄せて

ラヂオで警察無線を聴きながら犬は車を走らせる

浮浪者の凍死体や、

行方不明者たち、

事故や殺人、

警官どもの暴虐の捧げを

路上に眠るものたち

ボール紙に書かれた救済を乞うメッセージども

アメリカ——ホームレスのホーム！

教会で眠る男たち

少女は消防車の水を呑む

Two white boy

I black

Stay away for the car

My sister see you

地下鉄が暴力を乗せて走り、

犬はまたも車を走らせる

つぎはなにが現れるのか

「ニューヨークは最悪の街だ」とぼやきながらも

それはやがて内なる悲鳴に変わって

なにかにむかって犬は吠えてる

なにかにむかって犬が吠えてる

けれどもおれはページ越しのニッポン人に過ぎない

夜の情熱天使からの塵顔

神戸線の高架下で、

その塵顔は一瞬

きれいなものに映る

夜の祈禱者たち

酔っ払いの祈禱者たち

かの女らが夜をさらに熱くさせ

しっかとその尾を、その果てを掴んでる

——脅えないで、ちゃんとステップを踏んで！

——おれは踊れないんだよ、きみたち！

かの女たちは離れていき、

夜の情熱天使どもと契りをかわした

——もう大丈夫、だからステップを踏みなさい！

ぎこちないかつこうでぶざまな踊りをやらかしながらおれは、

悲鳴をあげそうになりながら答える

——もうよしてくれ、おれは踊れないんだ！

それでもかの女らも天使もおれを振りまわしてやまない

やがて手がちぎれ、足が切り裂かれたとき、

大きな笑い声が街灯を吹き飛ばし、

塵を巻きあげた

——この孤立者め！

天使のひりだしたものにやられ、

おれは立ちあがる——そうともおれはひとりものだ

きれぎれになったおれはかの女と天使でステップを踏み、

夜の塵顔へとゆっくりと還元されながらだ

消えてしまった。

ホテル・ジュークボックス

月をぶらつき

蓑を吸う

女たちはだれもが男と一緒に

おれには女がいたことがない

かれらは手をつなぎ

ホテルに入っていく

ちよいと月並みだけれど

おれは女たちを品定めしながら歩き

いつのまにか月へとやってきてた

いまもまた人生に勝ち目はない

好きだった女たち

そしておれをきらった女たち

をおもいだしながら歩く

アルコールはもうすっかりおれを酔わせなくなつてた

腑が傷みだして、おもわず吐きだしてしまふ

このとおりぶざまさ

だれにも相手にされない男たち

いまもやっぱり人生に勝ち目はない

だめだ

月は気球のようにためらいはしない

必ず昇っては沈んでくもんだ

ホテル・ジュークボックスよ、そのマネキンたちをきれいにしつてやれ

レイ・チャールズ、エルヴィス、ピエロにジェムス・デイーンが、

陽に灼かれ、いまにも色を失いそうになつてゐる

生田警察署

雨が降りだした

七月によくやく雨季はすべりこみ

ずぶ濡れにする

ちようどジョン・ルーリーが描いた黄色みたいに

顔を伝い、上着を濡らす

水彩画の町を唄ったのは大瀧詠一だったが

いまではこの町が水彩画のひとつだ

大きな画用紙もいらす

ただ歩けばそこに絵はある

そうさ、

道草をしよう

ささやかな声で喃語を口にしながら

そうともわたしはたったひとりの凡人だった

一緒にゆれよう

ベティとゾルグの映画みたいにして

複製のモナリザをからかうようにしてあれをやりたい

トラックは強がってクラクションを鳴らし

ホットチリをつくりたい

けれども悲劇にも幸運にもであえず

ぼくは口をつむぐだけさ

ちよつとばかりの刺激にもであえず

あるのは退屈の丘

一緒にゆれよう

一緒に語ろう

素朴で人間みたいになにかへとたどり着きたいんだ

たとえきみが人間でなくマネキンであつてもいい

手を離さないで、ゆっくりと見つめよう

声

地上を覆う夜

すきまのないその夜にそっと手を展す

低い空域

へりが蠅みたく飛び去ってくのをみながら

ずっとひとりの名を呼びつづけてた

——かのひとよ、

黙殺ほど苦しいものはない

魂しいのなかで熾き火が

消えようにも

消えてくれないんだ

どうか応答してほしい

そして離陸し

その声を

ここに洩らしてくれよ

ぶざまな格好なのはわかってる

けれども、

もはやあのへりを打ち落とす言葉もなくしてしまったんだ

——どうだい？

——笑えるだろう？

かつてあんなにもパロールってやつを隠避してたこのおれが

こんなにも語りつづけてるんだ

——地上を覆う夜の匂いよ、おれを絞め殺せ

——そしてすべてがなにも起こらなかったみたいにしてくれ

この路上でおれは声のない声で叫びつづけよう

夜がおれを曳航していくなかで

秩序

夜のつらなりはきれいで

夜行列車みたいにゆったりと

流れいったけれども

「笑いが消えてほほえみが消えた」

ありあらゆる衰退の構図を聴きながら

ひとりひとりがそうつぶやきながら去ってしまう

ぼくの路上を渴いた甲殻類みたいに車がひしゃげて

街灯を薙ぎ倒してた

なにかしらの合図でかれらは立ち上がり

困惑のなかで知らないふりを決めこんでった

でもだれかがかれらを追いかけるんだ

すばやく灯りが明滅し、交差する

でももはやここにはだれもない

けつきよくはおそすぎた

だれもが去っていった路上をたえまなく歩く

だれかが呼んでくれるのを待ちながら

迫りあがった恐怖感、

もしも過去に戻れるならば

まずかの女に伝えなくてはならない

でもなにを伝えればいいのかをすっかり忘れてしまったんだ

でもどうにかおもいだそうと努め、裏階段を登る

でもそれは延びていき、果てを知らない

でもぼくは登っていく

過去と現在の構図

ちぎれて読めなくなった地図と一緒にけつきよくは落ちてしまう

それでもすっきり衝撃を感じなくなってしまった

ぼくには弱点が必要なのもうなにも感じない

どんなひどい科白も吐けるようになってた

虐められては泣いてた自身はどこへ？

なにかから隠れてるような気がする

それでもぼくは歩く、歩く、歩く

そうしてようやくであった

たった一本の老木を

倒れそうなのいつ

そっと

ぼくは触れた

温かい

悲しみ

射水に射抜かれた

青鳩たちが

飛びあがって

アパートの窓々を曇らす

天使のような陰だ

でもあれは天使なんかじゃない

クローゼットのうちがわに閉じこもった子供たち

自裁への欲求と再建への欲求がぶつかりあい、

やがて魂しいは神と落伍者のあいまで煩悶する

遊びを禁じられた子供みたいにわたしはここにいる

自動式のかなしみと、

哀歌を奏でるロボットにかこまれ、

もう息も苦しい

なにもいえなかったころをくり返しおもいだす
やられっぱなしだったころのことやなんか

午前七時

朝の通りに停めおかれたフォルクス・ワーゲンの窓
だれもない窓に雀はとまり

歌う

けれどもぼくは感傷主義にもはや陥らなかつた

肉体がふくらみ、そして破裂するまで

歩みつづけなければいけないから

もはや暴走の時代はおわつた

破られる、

エスキースとマチエール

肉がたるみ、

氣勢も衰えたとき、

ぼくも三〇となつてた

かつてネオンみたく温かつた魂しいも

なんにも感じづらくなってただ逃げたくなる

この見苦しい身体から

この精神から

どうか動かしてくれ、

乳母車よ

どうぞ導いてくれ、

並木よ

蔭よ

馬はおもいどおりに走ってはくれない

周囲の個体差というものを羞ぢながらぼくは

ダートをやりくりし損なってしまう、

またも鞭打たれた

ぼくの騎手はほんとうにぼくなんだとろうかと訝ってしまえる

いつか厩舎に火をつけて馬主を蹴り殺してやりたいんだ

けれどももいったいそれでなんの片がつくというのか

けつきよくはやっぱりおなじところへと帰っていくほかはないのか

ぼくというぼくよ、醜いおまえのためにどれほどの犠牲があったかを知るがいいさ

なんにもないふりで赤信号を横切ってくおまえよ、

かれらからおれの言葉をとりもどすことはできやしない

孤立

なにもかもに明晰でありたい

ありがとうでもいいあって

すれちがうかたわれが欲しいもの

かたちはちがっても通じあうものこそ

ほんとうの慈愛ではないのか

救急車輛が通過していく

ガス・スタンドで人心を喪った患者たちがもうろうと立ってる

それはぼくのうちがわにそそり立ってきてとても明るい

こんな光景をもうしばらくも期待してたのだから

けれどもこうしたものも色がすぐに抜けてしまつて

午には用を充たさなくなる

きみはどこでどうしてる

ぼくはここでじっと待ってる

攻撃するべき神を求めて

愛？——そうひまつぶしにはいいかもしれない

きみのためにできるならそうもわるくないかも、だ
けれどもこうしたものもやはり色が抜けてしまっ

いつのまにやら慈愛でも期待でもなくなる

あらかじめ正常さを喪ったつけを払いながら

きょうも列にならび今度こそ自身のなまえが呼ばれるのを待ちながら
きみたちみんなから孤立してる

結句

いくつものなまえを使い分けて
かれは自身のおもいどおりに
ことをすすめようとしてる
けれど仮面はじきに剥がれ落ち
モノマネ鳥が室の隅で鳴くんだ
永遠の光景と永遠の錯誤のなか
落ちくぼんだ両の眼が苛立ちに燃え
それをはじき返そうとしてまたもおもいだす
若かったころを
青年はかれを追っ払い
自身に火を放った
かのひとの背徳に嫉妬し
つよい酩酊感で自身を欺きながら

けれど火はあっさりと消えてしまう

青年はおもう

もっと若かったころを

やがて朝が来てネオンが消えた

ぼくはきみを利用したことをずっと後悔してる

ずっと町の中心へと歩きながら

きみのことを口惜しくおもってる

憧憬

からっぽの電気冷蔵庫はなんとも悲しい

ぼくは絵葉書を待ってる

かの女はそんなもの送りはしないことを知りながらも

未練よ

あなたは悲しい驢馬のようだね

おもてから子供の泣き声がひびく

すっかり罨にはまりこんだんだ

とりあえずはシオランのアフオリズムを読んでなにかもを忘れよう

未来に対するぼくの幻視にかの女の姿はない

ただ青電車が雨のなかを走り抜けてしまうだけ

けれどそれがなんだが美しいんだ

加納町歩道橋

光りの色は八月

交差する点滅

たとえば八月は悄れたあじさいの花の残り香

たとえば八月は振れた螺旋階段の高さ

鳩どもがパン工場の窓を過ぐ

警笛が頻発して耳を突き破っては消える

この放熱器はもう機能しなくなってしまってる

この胸のうちっかわには熱でふくらみきった肺があるばかり

自動車たちは酔ったみたいに鈍く発進を待つ

ぼくの孤立などまったくどうでもいいことなのに

Uの字がいつまでも照らす

おおその輝きを隠しにねじこんで

ぼくはまたしても夕餉の支度を億劫におもいだすところだ

真夏日

ある夜のこと

少年だったわたしは車のしたに潜りこんだ猫

やつを追って側溝のなかに身をしずめ

眼を合わせた

何時間もかけて

わたしとやつは打ち解けた

餌をやり、その軀をなでてみたものだ

それからしばらくはわたしとやつとは秘密を共有したみたく歩いた

黒くていかしたやつがわたしは好きだった

それでも妹にことがばれてから

わたしたちはぎこちなくなってしまうた

かの女の連れてきたもう一匹の茶色い猫が

嫉妬深くからんできた

たぶん一九九四年だったとおもう

やがて妹がへまをやって親にばれてしまった

けれども叱られようがやつはわたしのそばに来た

もう来るな、とわたしはしふしふいっては家へ入った

ある午のこと

丘を降る階段の側溝で黒いやつをみつけた

薄めを太陽にむけてた

なにかの病気だったろう

口から汗をだし

息も絶えだえだった

もはやかつてのやつじゃなかった

わたしはどうすることもできずに

やつと一緒に日に灼かれて

かの女たちへ

そうして悲しむことをやめ

ふたたび葉につつまれた片手で

ぼくは帰っては来ないもののために祈る

いくつものかげたちはいつもみたいに廊下を過ぎる

なにをそれほど脅えてたのかはもうわからなくなって

嘸み砕かれた胡桃の実がぼくの咽を通る

いつだったかおぼえてないけれど

あなたたちがぼくに笑みをむけてくれたとき

ぼくはなんだか怖かったんだ

あの駅ビルや教室のなか

ぼくを笑ってた

いつかまたあの笑みをみたいといまだおもってる

それがどんなにも空虚なことと知りながらも

ああいっぽんの老木を小脇にたずさえて
あなたたちの望むほうへと消え去ってしまいたい
もちろんこうしてるいまでもね
だからぼくにことばを
ことばを

暮れの点景

やがておれのうちがわから零れ落ちる水よ

おまえはまたしても女の仕方です去っていくもの

街路樹のならぶ心象を急いで去ってしまうもの

こんな光景のために幾たびうろたえてきただろうか

暮れの点景、

そこに現れた車道が深く胸をえぐる

つよいまなざしを期待しながら

またしても惨敗するおれよ、

水は対向するひとびとを抜けてしまい、

もはや見えなくなる

濃くなっていくかげのうちでなにかもわからなくなる

やがておれのそとがわから展がる地下道よ

どこまでも明るいうちを往来がゆるい

暮れの点景、

ふたたび惨敗してしまつたおれの愁いにいま応えよ

熾き火

なんの断りもなしにまたしてもぼくはきみの戸を叩き

終夜営業のハンバーガー・シヨップみたく

冷たい光りを放ちながら立ってる

時計はもはや用を充たさなくなった

昏い室のなかでうち震えてるものはなに？

いまにきつときみを後悔させてみせる

ぼくに応えなかったすべての回答

そのためにうんときみは悔いるがいいさ

どのみち帰っていくところはない

だからいくところだって

どうとでもなれさ

すべてを無罪といいながら

またしてもぼくは両の腕をふりあげる

しかしだ、ぼくを待ってるのはきみなんかじゃない

鉄扉のむこうの熾き火や、

あるいは忘れ去られてしまったかの女たちからの悪口

さあ、その戸をあけなくともいいからすぐにでもぼくを追放したまえ

ひざかり

このぼくの敵どもよ、

どうか安らかなれ、だ

この季節はだれもが顔をしかめて去っていく

夕暮れをおもわず足通りでなにもかもが片づいてしまうもの

あたらしい夜を待ちに待ってどこかへとぼくも消えたい

けれども辛辣な街灯はぼくを閉じ込めたまんまでどっかうちがわに立ってる

そうともあれらがぼくにとっての知覚の扉なのさ

美しいふりをして遠ざかるかのひとよ、

きみはきみのまんまでいればいい

もう出会うことのないように

ふざまにとどまりつづけるぼくの魂しいよ、

慈しむ

このひざかりに咲いた太陽の一輪を差して

そいつの色が抜けるまでに描写していくんだ、すべてを

みおぼえない自叙伝、そのうちにぼくはいずれ居場所を見つけるだろうから、だ。

安全地帯

おれは神に捧げる

このとこしえなる夜明けの寝台を

そうともあまねく神々にこの裸体とともにして捧げてやろうじゃないか

おもえばもう十五年もまえのこと

孤立とつぶやいてみずからあけた空白を

このときばかりと大見得を切って語り尽くそうじゃないか

ささやかなる神よ

ぶつきらぼうなおれにこそ

莊嚴は似合うもの

草の匂いに埋もれつつ

またしても敗れ去ってしまうおれよ、

このときばかりだ

おおきな正后と連れだって

かたわらに愛しいものもなく

ただただ足早に去っていくことをどうか赦して欲しい

おれは神に捧げる

このとこしえなる夜明けの寝台を

そしておそらくはもはや戻っては来ないもののために歌をくちざさむんだ

怖れる子供

ぼくの詩神は閉塞と解放を行きつ戻りつ
太陽のなかに青い種子をみつけようとする
幼い顔したまんま追いつめにやってくる

きみの詩神はどこでどうしてる？
ぼくのはハンバーガー・シヨップに入り浸って
角の席でいつもコーヒーを啜ってるやつさ

きみとはいつも会いたかったけれども
きみはぼくに会いたくはなかった
送った詩集が返送されるまで
ぼくはどれほど待てばいいだろう

ひとはだれでも詩人であるときがある

寺山修司はそうだった

そして詩を棄て損なったものだけが

詩人として老いるとも

ぼくは老いてしまったよ

すべてを怖れる子供のまんま

空白みたいなもの

充たされない愛に渴き

餓えた犬みたいに通りをさまよっていく景色

すべての風景はぼくにはあまりにも美しすぎたんだ

左右の確認を怠って死んでいくものたち

交通はささやかなる墓標

そのまんなかに立ってまたしてもぼくは夢想する

気づけないあまたのきみに分散していくかたわらで

おもいもかけず塵となり、くずとなるんだ

さあ、おいでぼくのうちなる犬たち

さあ、おいでぼくのうちなる猫たちよ

いまや過ぎ去った内的歴史とともに

うち負かされていく魂しいよ、

せいぜい永遠にでもなるがいいさ

秘密はそのまんまにしておけばいい

だのにわたしはすべてを明らかにしてしまった

不思議となんの反響もないなか背をむけて立つ現し身よ

現になぜこんなにもおだかやかな心性ですべてをみているのか

わからない

ただただいえることはだ

すべてが終わってしまつて

きみもぼくも大人だということ

老いらくにはまだ早すぎるというのに

なにもかもが片づいてみえるんだ

そうともあのとききみがわたしを嫌悪してから

ずっとずっとわたしは老いのなかにいた

あらゆる風景を見喪つて気づくことの悲しみ

一九九四年

きみへの秘密をやぶったわたしをきみはその両の眼で憐れんだ
あるときからずっと茎は喪われ、

戸惑いと放埒のうちに閉じこもったまんま

たったひとつ好きだというだけでだ

もしも再会ができるのなら

まずはこう言ってやろう

もはやきみのために死ぬことなんかできやしないって、

それはまやかしにちがない

どうとでもいいあつて勝手に沈んでいくがいいさ

もうどうでもよくなった

なにもかもに感じない心が育ってしまい

なにもかもに手がかたなくなる

攻撃性を炙りだされ

足もうごせないときよ

ペニー・アーケイドのどよもしだけが

おまえを癒やすだろうよ

替えの利かないなものかを求めて

手を展ばすときだけ

ぼくはなにもものかになれる

わずか十分間の遊び

だれかさんはそういったぼくを笑うだろうか

果てのないところにたったひとりで立ち向かってるおまえよ

ともに感じあうことのない、その両手のなかにいっばいの花を奪い取れ

ベースボール・ゲーム

初恋のひと

お元気ですか

ぼくはそうでもないけれど

なにかにむかって走っています

たとえどんな打球が来ようとも何気ないふりを決め込んで

あたらしいものでぶっついていきたいもの

あなたはたしか五歳もうえだったから

いまではだれかの母親になっておられるだろう

ぼくはベースボール・ゲームみたいにあなたのことをおもいます

それは一塁にかけこんだかれがぼくをおいかけ、

二塁のぼくをあなたが助けてくれたこと

そうしてボールはいまだに空中をさまよったまんまだ

最後の学級活動の日

ぼくはあなたを探して校庭をさまよってた
けれど見つけれないまんまこのありさま

あなたのなまえすら知らないけれど

これだけは伝えておこう

悪い種子をまかないように

それから口のうまい男には気をつけて

また会うことなどないなかでぼくがおもえる最良のこと

事実はいつまでもだれも知らない草むらのなかにあるということさ

ゲームの終了をめざしてぼくの球が飛んでいく

フェンスのむこうがわにむかって

拳闘士の休息（無修正版）

試合開始はいつも午前3時だった

父にアメリカ産の安ウオトカを奪われたそのとき

無職のおれはやつを罵りながら

追いまわし

眼鏡をしたつらの左側をぶん撲った

おれの拳で眼鏡が毀れ

おれの拳は眼鏡の縁で切れ、血がシャツに滴り、

おれはまた親父を罵った

返せ！

酒を返せ！

おれの人生を返せ！

おまえが勝手に棄てたおれの絵を、おれの本を、おれのギターを！

凋れた草のような母たちが、姉と妹たちがやって来て、

アル中のおれをちつと眺めてる

おれはかの女らにも叫ぶ

おまえらはおれを助けなかったと

おれが親父になにをされようがやらされようが助けなかった！

だれがおまえらの冷房機を、室外機をと叫んだ

おれは姉にいった、——おれはおまえのタイヤ交換をしたよな？

じぶんの仕事を遅刻させてやったのにありがとうもなかったよな？

照明器具の倉庫をおれは首になってた

おれは姉のつらを撲った

おれの拳がなんとも華麗に決まったその瞬間

いちばんめの妹から階段のしたに突き落とされた

おれの裂傷した後頭部からまたしてもくそいまましい血が飛び散った

不条理にもおれには血がおれを嗤ってるみたいにみえてならなかった

気がつくとおれは暗がり立ってて警官ふたりとむかいあってた

おれは——といった、ポリ公はきらいだと

かれらはじぶんたちの仕事を刺激されて少しばかり悦んだ

しかしおれはそれ以上かれらを悦ばす気にならなかった

だから、さっさと寝るふりを決め込んだんだ

そして明くる日おれは町へと流れてった
そして三年経ったある日夜間高校時代のやつが電話してきた
おれの絵をオフィスに展示したいとやってきた
おれは、——かまわないといった
ただし展示料はとると
するとやつは絵を売ろうといった
おれはいいやいや諒解した
それでも絵をまとめて送り
展示案やポスターを仕上げて
神戸から西大寺くんだりまで行ってやった
やつはポスターを気に入らないといった
場所である、椿井市場が目立ってないといい、
“bargain sale”とこう個展名に難癖をつけた
後日ふたたび西大寺のオフィスに訪ねると
資料用の素描に“The Outsider Art”と直かに書かれ
市場の各所に貼ってあった
そいつはいままでみたこともない悪意だった
おれはポスターを造りなおしてた

やつは興味を示さなかった

「アウトサイダー・アート」

それは手垢つきの過古だった

それはすでに体制のものだった

おれは真夏の市場でひとり汗をかき通しだった

夜になっておれとやつは工業用扇風機を載せたトラックで通行どめに遭った

やつは警備員を面罵して——ここを通せとわめき散らした

責任者呼べ！——おれはハンチングに隠しきれない恥ずかしさでいっぱい

やつが警備員に呶鳴った——そんなんだから、そんな仕事しかできねえんだよ！

警備員は小さく「このばかがッ」といった

するとやつは真っ赤になってかれに飛び込んでった

地面に叩きつけたれたかれが「警察を呼んでくれ！」と悲鳴した

おれはやつを撲るべきだったかも知れない

しかしそいつはまるで屁をひってから

肛門管をしめるようなもんだった

きつと拳闘士の休息っていうやつだ

トム・ジョーンズはイリノイ生まれの作家

やがてひとびとがあつまりはじめ

そのなかには非番の警官もいた

それでもやつはひるまずにわめきつづけてた

それでもやがて警官が横断歩道のむこうから歩いてきたとき

おれに運転しろといった——なぜ？

免許ないから、ばれたら困る

おれはエンジンをかけ、サイドブレーキを解き、

警官がたどり着く寸前にロウ・ギアに入れて発進した

角をいくつもまがり、追っ手が無いのを確かめさせてやつはいった

こんなことが週に何回もある、でもあの警備員は仕事に責任感がなかった

そのとき口にはできない感情をおれは自身に感じとってた

ふたりで扇風機を事務所の壁につけようと疾苦しながら

やつはいった——おまえの学習障碍なんて甘えだ

おれはいった——杖や車椅子は滅ぼすべきというわけ？

ハーパーを呑んでからやつの室まで眠りにいった

そこには喰うものも、呑むものもなかった

本棚の目立つところに「超訳・ニーチェの言葉」があった

そのばかげた本でいっぺんにすべてを諒解した

このくそつたれは超人にでもなったつもりなんだ

そしてみんながそうなるべきなんだって信じてるんだって
そして友情はおれを必要としてないというのがわかって
憎悪を爆発させることにたやすく傾いてしまった

あるとき公園を若者たちが騒ぎまわってた

男たちと女たちの嬌声に耐えきれず

アパートを降りたおれはそのなかのひとりに狙いを定め
パンチを繰りだしたがやつらの足元はすばしっこく

ひとり残らずに逃げられてしまった

そこでようやくおれは気がついた

バンテージを忘れて

重量も超えて

いることを

そして最悪のことにもはや若者ですらないということ

かつてを映した鏡をおれは赦すことができないでいる
そいつはどうしてかおれを縛りつけてやまいなからだ
遠い恋の憧憬

なぜここまで来てもおれを苦しめようとするのか

もうなにも信じたくはないんだ

現し身は通りのルンペンたちを一瞥しては去っていく

どうしてなにかもが暴かれてしまわないだろう

おれのような犯罪者をだれも追わないんだろう

きょうおれは泣いてる

過去のひずみがおれを苦しめてやまないからだ

どうか無視しないで

このおれの限らない問いかけに答えてくれ

もう我慢はできないんだ

きみの苦しみがわかってるけど

もうきみの答えなしでは生きていけそうもないんだ

どうかこの書き割りが敗れてしまっまえに

もういちどでいい

声を

ただ声をくれ

再会

もう二十年くらいだ

きみとの再会を望んで生きてきてた

なぜだろう

もはやきみはおれを拒んでるというのに

風景は色を喪って花となり散っていくもの

だからっておれの色彩までも奪わないで

お願いだ

もう一度きみに会いたい

手水みたいな清らかさできみに囲まれない

おれは射水を放ってきみにおれの栄光を捧げたいんだよ

どれほどきみがおれを嫌ってもおれのこころはきみに向けてる

どうか髪を解かないで

銘木

遠くの木とちかくの木

それからそのあいまできみが立って育ち、

そうしてやがて古い、

きみは皺に覆われてしまう

突然の歯痛に悲鳴してしまいきみよ

もはやみえなくなったところから

ぼくは手紙を書いてる

秋の日よ

形式はつねに辛辣なおもづらで表現に侵入していき

激しい歯痛にぼくも耐えられないでる

そんなときうちなる木々が

かぜにたなびき

悲しいおとを

発てる

ぼくは慌ててカウンタにむかって

ラム・コークを呼ぶ

それでも

ぼくの望むものはちがう

黒柿の義足で盛り場をゆるりとあるく姿だ

そんなぼくを見てきみが頬笑んでくれればいい

隣人

母と祖母を殺した北海道の少女へ

ある男がいった、——飛びだしてきたかの女をだれも責めることはできないと

着古した上着を裏返してかれは床屋へと去っていく

たしかにおれもかの女を責めることはできない

けれども情けなど感じないし、

また憐れんでもない

そういったことが繰り返されるという、

ありきたりなことに気づかされるだけだった

次第に秋は不覚にも冬に変わって

緑色の研究も枯れ色に発色変化を起こす

性のとぼしさに苛まれながらも

立ちあがる青年たち

手遅れになるまえにみずからを汚し給え、だ

おれは無風の正午を北にむかって歩く

ビールとチーズとナッツのために

まだひと気のない酒場通りで

またしてもおれはかの女についておもう

いったいだれが救ってやれたというのか

うろめたいのか隣人ども

手を触れるのはおまえたちには赦されないんだ

けれどもおれだっておなじようにしただろう

けつきよくはおれも冷たい隣人のひとりなんだからな

やがて夜が来てひとびとが集まり始めた

あまりのどよもしに嫌気が差し

またしてもひとのいないところを歩く

しだれ柳の傘が立ってた

ゆっくりと歩み寄り

その樹皮に手を触れる

かつてアルコール専門病院でおれはこんな話しを聞かされたっけ

——あそこに三つの木があるだろう？

——ええ。

——そこで三人が首をくくったんだ

やつは薄笑いでいい放ち、
蒲団に潜りこんだ
くそ、
だれも救われない
飛びだしてったかの女の
星かげのまなざしよ、
どうかおれをおもいきりに
さげすんでおくれ

多かれ少なかれ——映画「talk to her」に寄せた

ハビエルがいった——ただ心が伝わらなかったんだ、と

永訣こそ友人

多かれ少なかれ

かの女たちにしてもかれらにしてもけつきよく

それほどに親しいものではない

十月の終わりに窓からおもてを覗く

救急車一台がさわがしく去って

若者たちが公園で戯れる

ぼくはこれといった感傷も喪い、

すでに焦がれるということを忘れてしまった

夜の深いところで澱みながら、

またしてもだれかに鈍を振りまわす

そうして嫌悪のうちっかわで

みずからをなくしてしまうんだ

——ひとと触れあったことなどほとんない、とベニグノはいった

そしてぼくにとってアリシアはいった

——好きとか、嫌いとか、軽蔑するとかじゃなしにあなたの存在に困惑しています

そしてぼくにとってマルコはいない

べつにもうどうだっていいことだ

隠れてマスを掻くように

ぼくはさよならと

つぶやくことで

みずからを癒やし

精神を律する

もはや出会うこともないだろう

諒解し合うことも悲しみ嘆きあうこともないだろう

ましてや喜びなどもってのほかだ

ぼくがひとにできる最大のものは別離

これこそ

撰択の余地のない、

まさしく愛だ

2015

ロードムービー、ロックンロール、アメリカ、天使。

*ロードムービー

かれらはたがいになものかを識らない

むしろ識るためにともに歩き、または走る必要があるということだろう

わたしがおもうに自動車や道は、自動車や道のように見えるだけの装置であって、

それらそのものではない道標なのだ

映画はそこに介入するものの、かれらの関係を解釈しようとはしない

それはしてはならないことなのだ

だからこそ映画は映画でいられる

映画は決してかれらに介入しはしない

やがてかれらがわかれようが——かれらはわかれることになっている——映画はなにもしない

それが映画を映画たらしめてるのだ

では観客であるわたしはいつたいなにをしてるのだ？

それはおそらくかれらを追うことだ

わたしはかれらなしではいられない

かれらこそわたしを奮い立たせてくれる存在だから
遠く、遠くのほうまで追いかける
やがてすべてが暗転して
なんにも見えなくなるまで
ロードムービーはつづく

*ロックンロール

チャック・ベリーを識ったのはマーティ・マクフライを通してだった
深海のダンスパーティーでかれはギターをかき鳴らした
タッピングをした、背中で弾いた、アンプからジャンプした
そして舞台のうえをもだえるように、蛇となって動いた
わたしはまだ二歳だった
それ以来わたしはロックを飽きもせず聴いている
十四歳のころ、わたしは幼馴染みにいわれた
おまえがロックを聴くなんてヘンだって
だけれどロックンロールは誕生以来、
あまねくひとびとに契機を与えつづけてる

わたしも与えられたひとりなのだ

だからきょうもロックとともに

おもしろい描いてる

教科書に立っていた同級生の女の子たちのことや、

広告のなかの素敵な女の子たちのこと、

音楽雑誌の批評文のあの皮肉めいた文明を、

すれ違いざまにぶつかってきたあらゆるおかしなできごとなんかをだ

やがてすべては物語にかわってしまいうから、

わたしは作品以前のひとびとやものたちをできるだけ抱きしめたい

抱きしめたいのだ

放したくはないのだ

ロックンロール、

きょうもありがとう

そしてあしたこそきょうなら、だ

「ロックンロールはひとを苦悩から解放させない。苦悩を抱え込んだまま踊らせる」

これはピートの科白、でもザ・フーには興味がない

わたしは「おまえはおともだちじゃねえんだよ」といったときの宮本が好きだ

「願いによって神に祈ることなどできるものか」と叫んだジムが好きだ

ロックンロール、それは神が遣わした、
男のための苦汁である

*アメリカ

幼年期から棲むわたしの幻影のアメリカ大陸
なまえのない通り

あるいはその場かぎりのなまえを与えられた通りや町やビルディング、アパートメント
ブードルスプリングは存在する

ベイ・シティも存在してる

チャンドラーのハリウッドから

グーデイスのフィラデルフィアへ

ブコウスキーは「涅槃」というなまえの詩でこう書いていた

目的を

すっかり見失っては

あまりチャンスは

望めない、

かれは、バスに乗って

ノースカロライナ州をぬけ

どこかへ行く途中の

若い男だった（訳||原成吉／「ユリイカ」95年5月）

いっぽうトラビスは、テキサス州パリスで仆れ、

息子ハンターとともにヒューストンへ妻ジェーンを追いかける

それは一九八四年のピープ・ショウだ

男も女もやがて穢れていく子供たちもみんな

悪夢をアメリカン・ドリームへと欺こうとして詩を書く、小説を書く、絵を描く、マス搔く

いちど失った友愛は決して二度とは帰って来ないというのに

ビッグ・ガバメントの垂れ流すまやかしにやられて

どこにも行き場を見失ってしまうのだ

好機はそのものにはちがいないけれど、まるで紙切れのようで、

いちど握ったらもう使いものにはなりはしないのだ

さてサンアントニオを振り切ったトラビスはハンターに伝える

「じぶんが触れようとするものが怖い」と

そうしてジェーンとハンターを結びつけて消失する

わたしはそんなアメリカが愛おしくてたまらない

「戦争に勝った国の映画なんか観ない」と清順はいったけれど

わたしにはどうしても必要な毒物がアメリカなのだ

一九八四年ジャームツシュは“Stranger than paradise”を完成させ、
アメリカのふ厚い皮をひったくってしまった

あの三人、かれらはニューヨークの片隅からフロリダへむかい、
トム・ウエイツは臆病者の実験音楽、

リッキー・リーが“The Magazine”をだし、

西脇市民病院でこのわたしが七月三日に産まれた

でもそんなことはどうだっていい

ラブホテルの看板“TOM BOY”の燦めきを感じながら、

わたしはアメリカを記述している

東海岸よりも西海岸が好きだ

ブローテイガンは、

銃でみずからの頭をふっ飛ばした

ああ時が流れ、

草の葉が夏色に染まる

子供のころずっと夢だった、

デロリアンにまだわたしは乗ったことがない

もし手に入れたらば、

さてどの時代にいくべきだろうか？

*天使

きみの電話を教えて欲しい

いつでも声が聞えるようにだ

きみにはいつも世話になっているから

どうしたってお返しがしたいのだ

きみにとってなにか喜びだろうかしら

わたしはわたしでなかったころの記憶を憶えてる

わたしは木の畝にうづくまる哺乳動物で、

麓のホテルから漏れる灯りをいつも物欲しそうに眺めていたのだ

これはいつかきみが教えてくれたこと

まだ憶えているだろうかしら

これまでに何度も病院の寝台のわきできみと一緒に過ごしてきた

二十九歳の六月がとびきり印象深くおもいだせる

眠れないで朝を迎えたとき、

突然温かいものがわたしを包んだのだ

おかしな気分だったけれど気持ちが悪かった

胸のうえを大きな手が撫でてるような触りだった

それはたしかにきみの羽の感触だった

わたしはきみに気づいた

そして太陽を見た

永遠そのものが唇ちをあけて笑ってる

いつかまたふたたび会おう

今度は病院のそとで

わたしにとっての疫病神であるアルコールをやりながら、

犬のラベルのシェリル酒をやりながら、

今度はきみの告白が聴きたい

産まれたばかりのような、

物語でも

小説なんかでも

ない、

作品以前の作品を

一緒になって回転木馬にゆすぶられながら、

さ、

どうか、
叶いますように、
さ、

主題歌

「広告募集」の看板がつづく田舎道

起伏の激しさに咽を焦がしながら

かつて父の自動車で走り回った

いまでもあのあたりを歩けばおもいだす

いとしいひとたち、

あるいはいとしかつたものたちをおもいだす

それは一九八四年のピープ・シヨウ

あるいは二〇一五年のわるい夢

喪ってしまうだけの暮らしなら

もうとつくにうち棄ててる

懐かしいなどというおもいもなく

葬ってしまうだろう

けれどもそれは望みではなく

抗いですらない

かつて美しかったもののために歌をくれ

あるいはかつて慈しみをくれたものたちに歌を

おもいはぐれてかの地へたどり着く

バスの発着場にひとり立っては

迎えてはくれないものなまえを叫ぶ

かれらかの女らはなにももっちゃいねえ

ただもうこっから放たれてくんた

急ぎ走りでも掴まえられない

きつどどつか遠くで歩いてるにちがいねえ

さつきまでとちがうやり方でその身を焼く

「広告募集」の看板がつづく田舎道

起伏の激しさに咽を焦がしながら

もはやおれをいたぶってくれないきみをおもう

両の手の筭がおれを撃つまで待ってやろうなどとはおもいはしない

それは一九八四年のピープ・シヨウ

あるいは二〇〇〇年の別れるとき

たくさんの主題歌を憶えた

けれどもそんなことを忘れてぼくこっぴどい幽霊たちから

いっつもとやしつつけられてる

ただそれだけだ

成人通知

成人式の日は

薪わりをしてた

父とふたりきりで霽のなか

斧をふっていちにちを過ごした

あたまのなかじゃ

かつての同級生やら好きだった女の子たちが着飾って歩き

やがてはそれぞれのつがいを見つけてしまっただろうのをなるたけ考えないようにしてた

いっぼん、

またいっぼんと

薪をわるたびにおもった

いまごろかれらはおれのことなど忘れて

かの女らはおれから遠くはなれて

歩いている

笑ってる

愉しんでる

わたしはひとつの木をふたつにしては父のほうへ投げ

早く同窓会の報せが来ないものかとおもった

かの女らの顔や声

うしろ姿が分散する

夜更けてからひとりテレビを眺めてると

それぞれの土地でおなじ歳のやつらが愉しそうにしてた

わたしもそっちへいければよかったのに

けれどもわたしには連れ合うものがない以上、

ひとりで手斧のおもさを感じてるほかはなかった

いまごろ、

どこかの町ではかれらが、

かの女たちが愉しんでるだろうこと

そしてわたしには声をかけてくれるだれもないのをおもった

やがて手斧はおもみを増して

薪をわるだけではすまなくなった

だけれどそんなことはわたしにとってあずかり知らぬもの

好きにしてくれ

わたしは手斧にそう告げた

物置の汚れた寝台にかけていつかはと願った

いつかはタイムカプセルをあける日が来る

さもなければかの女に逢える日は訪れはしない

けれども列をはぐれ、

ひとりになったものにはなにもありはしない

そいつを識るのに一〇年もの歳月をかけた

2016

ブrossの下着

だれかおれを連れ去って欲しい

たとえそのだれかが

きみであつても

それはとても素敵なことで

長い孤立からきつと

救つてくれる

おれの人生に勝ちめなんかないのは知つてるとも

まちがつてることが多く

ただししいものはあまりなくとも

語りかけてみたい

すべてを

女を知らないやつがこんなものを書いてるんだ
嗤いたければそうするがいいさ

平日のマーケットで

金色の星を浴み

ブラームスを聴きながら

ブロスの下着を撰びたい

そしてアパートに帰って

シュトラウスのドン・キホーテをかけながら

かの女がくそをしたあとの、

便所の水のながれをずっと聴いてたい

ずっと聴いてたいんだ

それはきつと

美しいにちがいない

無意味

きのうの夜

酔っ払ってかっつての女友達を罵った

くたばれ

ちび女

と

だって

かの女がおれのことを黙殺したからだ

おれはおなじように何人かを傷つけ

それからマス搔いて

眠りについた

翌る日

かの女は怒ってた
おれはただただ疲れきってて
手短にあやまった

由美子はいった

あなたの発言に驚きと不快を感じます
あやまってもらわなくともけっこうです
どうせ本心なのでしょう

わたしはあなたの友達になる気はありません
あなたの考えはわたしにはあわない
似たもの同士とつきあうべきです

スベタめ

そうおれはいつてかの女を拒絶した
もちろんそんなことは無意味であったし
多くの女たちが消えて去っていくのを
おれは見てるだけでしかなかった

ハイヒール

かたっぽうだけのハイヒールをみつけた

赤くて

エナメル質の表面加工がそそる

おれは室に持ち帰って

本棚のうえに飾った

まるでおかまになっちまったみたいな夜だった

それからしばらくあたりをぶらつてたら

今度は手袋をみつけた

青くて、手触りのいい代物で

おれはイーゼルの角に飾った

まるきり女にでもなったみたいな朝だった

きのうハイヒールを穿いた

そして手袋をした

ちなみにおれは左利きで

おれの逸物もおなじく左利きだった

おれは手袋をした手でそいつをしごく

おっ立てる

やがてこらきれなくなっておれはハイヒールを生卵と鳥のはらわたで充し、

おれ自身を突っ込んで激しくうごかした

まるで足のきれいな女が猛スピードで走り去り、

やがてあたらしい世界へと飛び込んでいくみたい

眼のまえのなにかもが美しく輝き、

おれはハイヒールのなかでイッた

春の日よ

おれは神に慈悲を求めない

おれは友人や恋人を求めない

おれの夢は生活保護費でデリヘルを呼ぶこと

A Dream Are What You Wake Up From

かろうじて二十代だったころ

赤十字病院にいた

なじみとなったアルコール性の膵臓炎

好きだった女の子をおもいだしながら

やがて来るだろう

使者たちに願ったもの

けれどかれらは来なかった

天は鳥の羽根

あるいは猫の唇

退院してすぐにかの女の手がかりを探した

それくらいどうしても会いたかった

幸いにも見つかって

託けを送った

けれどかの女はあまりに冷たく

あっけなく返事を返して来なくなった

またわるい酒に吞まれて

かの女が沈黙した一年ものあいだ

かつてのいじめっ子たちに罵声を浴びせてまわった

きみはいった

ぼくがひとを傷つけたと

けれどきみはかれらがぼくにやった仕打ちを知ろうとしなかった

あれから一年と三ヶ月

夜の台所でひとり鱈を捌くとき

よくきみの科白をおもいだす

「ひとを傷つけるひとはきらい！」

ぼくだってそんなやつはきらいだし、

きみのことももう好きじゃない

ひとを愛することはきびしく

それに美しいことではない

かの女にきらわれてとびきり悲しいのは

かの女にきらわれてもなんともなくなったことだ

かの女に逢えないままぼくは歳をとった

ぼくはわるくない

ぼくはなにもわるくない

だれもいないところで

午も夜も繰り返す

かの女を知ってから今年で二〇年になる

けれど友佳子はいない

かつて愛しかったもののためにできことはたったひとつ

ぼくのなかで死んでしまったあらゆるものたちと

かの女の墓を見下ろして

A Dream Are What You Wake Up From

ひとごとみたいにつぶやきながら

だれもぼくを好きになってくれなかったことを祝福する

2017

使用人たちの幼年期

つめたい夜にはふるいものごとをおもいだす

さまざまな場所でおなじことがあった

さまざまなことがおなじ場所であった

時代が、

あるいは立場がかたむくにつれ、

大人たちは臆病になり、

それを見せまいと

拳にものをいわせた

父は母を罵り

マグカップを投げつけ

母は隠れたところで父の悪口を

子供にいいふくめた

いやしい女と

いやしい男

だれが生け贄になるかをいつも政治が決める

ひとつのかたちをしたひとでないものたちが

知らないうちにみんなを呑みこんで

友だちだったはずのものたちが

友だちだったはずのものへ

石を投げる

子供たちは知らないうちに親のふるまいを身につけ、それぞれの大人を演じる

みんなはみんなの瑕疵を探りあった

棲んでる家が中古とっては嗤い、

身なりが貧しいといって撲った

うわさ囁やかげぐちをいって

たがいの結束を高め、

そのつらなりを友情と呼ぶ

いずれだれかに雇われること

だれかに使われることを

撰びとり、

わたしたちはかれらかの女らの世界から永久に追い放たれる

眼を醒ませ、

ひとりで去っていけ

そこにはきみの求めるものはなにひとつだっていない

おもいでよ、

きみはどうしてそんなにも悲しい

ぼくがかれらかの女をおもいだすとき、

こんなにも美しいというのにきみはそれを知らないんだ

かつての雨よ、

茨は墓を抱いて

ぼくをずっと待ってる

聖家族

たしかそんなまえの焼肉屋があつて

郵便局からでるたびにみた

どうしてあれが不良どもにとってマスター・ピースなのか
いつもおもつてた

あの飾りのない灰色の積み木で

どんな愉しみを味わつてるのかと

やがておれは配達夫を辞めて

長くのたくら暮らしてた

そして冷たくさめた自身の物置で星を眺めるとき

いつもおもわずにはいられなくなったよ

おれのほんとうの聖家族はいま

どこの宇宙を漂つてるかを

あれから十数年も経って
いまだかれらには逢えない
見つけてやってほしい

父

かつてかれはこういった

おまえなんか橋の下で拾ってきたんだ

おまえなんか人間やめてルンペンになれ

おまえはばかでもちよんでもできることがない

おまえはなにやっても勤まらない

おまえは仕事をすぐ辞める

おまえなんか死んでしまえ

おまえのものなんかじゃまだから棄ててやったわ

おまえのものを片づけたんだから感謝しろよ

おまえのやっつてることが金になったことがあるのか

おまえの稼ぎで生活していけるのか

おまえのやったことなんてちよつとじゃないか

おまえは家に入る資格がない

おまえのためにみんながいやなおもいをしてるんだ

おまえは親を撲つからなにされても赦すべきだ

おまえはあることないこと書いて世間に発表してる

おまえの文章には書かれてないことがあってうそを書いているのと一緒にだ

おまえは姉みたいな優秀さもない

おまえは妹たちみたいな我慢強さもない

おまえなんか消えてしまえ

おまえなんか野垂れ死ね

おまえみたいなもんいらぬ

おまえの病気はぜんぶおまえが造ったもんだ

おまえがアル中だつてうそつくな

おまえが自閉症だつてうそつくな

おまえがアスペルガーだつていい加減なこといいうな

おまえを好きな人間なんかない

おまえをだれも愛してはない

おまえの全部自業自得だ

おまえをつくつて後悔してるんだ

おまえは乞食になるがいい

おまえなんて姉の結婚式に呼ばなくてよかった

おまえはひとりで暮らしてひとりでくたばれ

おまえは文句ばかりいって仕事もろくにできない

おまえの存在を忘れたい

おまえなんか、

おまえなんか、もうこの家には入ってくるな

おまえのものなんかないし、

おまえはこの人間じゃないからな

おまえ自身でせいぜいやるがいい

さてそろそろ畑を耕すでしょう

それから女房をいびってひとときを過ぎるかな

おおわが父よ

立派な父をもったものだ

これでぼくは安らかに死ぬる

これほどまでに偉大なる親をもってはぼくのいる場所なんかないからだ

母

母は

いそがしさのあまりに

母性を投げすててしまった

かの女は牝犬のまねがうまかった

ぼくが学校を拒否するればガラスをわって

ぼくの棲む物置まで入ってきたもの

かの女はまるですべてを知ってるみたいだったけれど

なにも知らないのがつねだった

世界一のもの知らず

それが母だ

母に幸あれ

ぼくを助けてくれなかったかの女に

花々に充されたあなぐらを与えたまえってね

い
ち
ど
ろ
と
井
す
る
女

かろうじて

じぶんだらけの身勝手な愛のなかで

クローゼットが倒れ

机が逆さになる

冷たすぎるんだ、

なにもかもがっておれがいった

ぼくはなにもいえなかった

かれはすべて室をめちゃくちゃやくに

室のすべてをめちゃくちゃにしてった

おれはさもない

それはぼくだっておなじ

かろうじて掴みとったのはおれのなかの月の光り

月の光りのなかで立ち止まってるぼくの姿だ

トイレット・ペーパーに書かれた最後のラヴポエム

鳥が

落ちる

季節のなかへ落ちる

真昼のスタンドバーでレインコートを脱ぐみたいに

もちろんのこと

かの女らの人生にぼくはなんらかかわりはなく

ぼくの人生にかの女らはなんのかかわりもない

いくつかの断章とともに

燈しを消すだけ

十二月の旅

どうしてそんなところで

わたしの声がするの？

どこまでいっても

声がするの？

12月たち

ひと知れず死なば真砂の

光りなき峪

ひらいた手のひらで

おまえの、

なかの

もの

に

気づく

旅のおもぎしは

冬

しがらみのないからだを解いて

どうしてそんなところで

わたしの声がするの？

どこまでいっても

声がするの？

縁日の世界

九月になるといつもだ、

羞ずかしくなってしまう

ながいかたおもいも終わって

気づかされるのはみどりいろ

ぼくにとって郷愁とは森と丘と灰

そしてとり残された新興住宅地のかなしさだ

道場町生野の観音さまにかつて願ったまま、

忘れてしまった禱りがいまになって届く

もはや遠く過ぎ去ったものたちが、かつてないほどに近くから乱反射してる

なにをいまさら？

けれども、

これこそが縁日の世界

その世界をたずさえて歩きづつけることか

みずからのうちで愛がうずくのをぼくは知ってる

戦いは終わった

呪いと執念深きは棄てた

ゆっくりとおもいだす

かの女と初めて会ったころのこと

いまもう喪われたところであの子の舞踊に見惚れてしまったことを

家までの帰り道でお喋りをしたことやなんかをだ

どうかかの女の家庭が幸せであるようにとおもってる

そうしてぼくはおもづらをあげて諒解する

これから寿ぎにむかって

秋霖のあいだをたわふれながら

歩いていくことが授けられた方法なのだ。

さよなら、

ごめん、

ありがとう、

いつかふたたび会えればいいと願いながら、

知らない駅へときぎはしをあがる

たぶんまたしばらくのあいま

じゃあ。

かつての愛のために

去る年の一月

吉原幸子を知った

葺合警察の

留置場にて

かつての愛のために拒絶されて

たったひとりで歳を迎えた

かの女はこう書いてた

傷つくことでしか確かめられないひとと

傷つけることでしか確かめられないひとと——「鞭」

いっぽうでアイリーン・ウエイドは、

「いちばん悲しいのは

若いうちに命脈が絶たれることでなく、

醜く年老いてしまうことです」と書き残して自裁し、

ポール・マーストンは、

「なにもかもが演技だ、からっぽなんだ」といった

ぼくがだれかを愛するのは傷つくため

拒まれ、

黙殺されることでしか、

愛を確かめ、

からっぽを埋めることができない

ありふれたものがなにも手にできず、

ぼくはぼくに執行猶予を科す

それもみな

かつての愛のためについてやつ

カツカワさんからの葉書

ぼくはカツカワさんの「ガラスの少女」や「猫の国」が好きだ

ぼくは「まぼろしまぼちゃん」でかれを知った

92年

まだ八歳で

みずいろのはなみずと

くさいろの冒険譚

放課後はしょっちゅう近所の小惑星を旅して

なんどもお母ちゃんを泣かせたっけ

カツカワさんは

ぼくの詩を「破壊や怒りを感じます」といった

けれどあの詩はぼく自身のガラスの少女にむけたものだ

ぼくが幻想分離装置を組み立てながら

あの子のことをおもうとき

漫画家・勝川克志さんへ

鍵をかけたはずの抽斗からゆっくりと

ミミ子さんや

椿ちゃんか

顔をだす

きみはおれのなまえを知ってる

山田太郎こと岩城春雄氏、投稿の夜に

おまえはおれのなまえを知ってるだろう？

わたしはカミュをだれよりも読んでる

——そうかれはいった

おまえのような若造にわかるはずがない

ムルソーはアラブ人を殺したんだ

太陽のせいでちゅよーなんていった

わたしは若いころ、いつでもカミュを手放さなかった

おれほどカミュを耽読したやつはいない

それにわたしはカミュのような高等ぶつたものなんか読んだことはないし

そんなものを詩に引用するやつがきらいだ

ツェランやラカンだってその類だ

あなたがたに忠告するが、

野党連合の統一候補者がまちがっても親鸞会のセクト出身なんかじゃない！

おまえらはてめえを天才だと妄想してるがな、

自己評価と外部評価のあまりもの落差にほとんど

陰惨なほど性格が歪んでしまった万年文学青年ちゃんなんだ。

わたしにいわせるとお笑いでしかない。

急性発達精神病だ

もちろんわたしは自己評価と外部評価になんの矛盾もなく

相手をズタズタに切り裂いてその正体を暴いてやれる

内田樹先生がいつてるように

「外部評価が低く、自己評価が高い人間」を「バカ」という

もちろんわたしは例外だ

内田樹という自称思想家の抱えている心の闇がこれでもかと晒されていて

おれはこの人の無意識の荒れたさまに痛々しきすら覚えた

この掲示板にはわたしが必要だ

自己批判のできるわたしが必要なんだ

わたしは敬われるべきなんだ

それをわからないやつには投稿資格を取り上げてやれ

糞投稿のオンパレード

これ、どうしろっていうんだ？

コメントなんか書けるシロモノじゃない

まじめにやってるやつはいつも割りを食ってるんだ！

出てこい運営人ども！

フォーラムを登録制にしているのになぜ投稿板をそうしない？

これでは投稿者への攻撃や、

投稿板への荒らしが自由自在で、

投稿者の安心への配慮がいつさいない

ダメ板であることを世間にさらしてるのもおなじだ

では、どうして投稿者が安心して投稿できる板にしないのか？

フォーラムを登録制にしているのに、

なぜ大事な投稿の場を最低でも登録制にしないのか？

おれはカミユをだれよりも読んでるんだ！

わたしはカミユなんか読んだこともないんだ！

荒らしや特定投稿者への嫌がらせを黙認してでも

自由な投稿の場であることを選ぶというのなら

それはそれでひとつの覚悟だ

しかし、それではマジメに一生懸命、

いい詩をとがんばっている人間はコケにされているようなものだ

ホモ牛乳どもめ！

おれに謝罪しろ、蛆虫はおまえらだ！

おれに謝罪しろ、差別主義者はおまえらだ！

ここには詩人なんかいない

例外的におれしかいない

詩人なら壁に向かって書け

おれのようにひたむきに書きつづけるんだ

おれはこれから詩を書くんだぞ！

——そう叫んでかれは壁に落書きをする

おれはこれから詩を書くんだぞ！

——そう叫んでかれはひとに絡む

おれはこれから詩を書くんだぞ！

——そう叫んでかれはみずからの匿名性を傘に来て他人の過古を漁る

おれはこれから詩を書くんだぞ！

——そう叫んでかれはタダの乗りをつづける

おれはこれから詩を書くんだぞ！

——そう叫んでかれはいつまでもいつまでもおなじステップを踏みつづけるのだ

通好みのシ人

まったくもって憐れだねえ。

いってるとはぜんぶ揚げ足取り。

もちろんおれなんてでたらめさ。

でも正面から答えられない、

相手の過古やら、直接関係のない話に拘るんだ。

言葉に詰まれば、相手の年齢や階層を揶揄し、

または精神病人扱いして門を閉じる。

それで勝ったつもりでいるのなら、なお憐れだね。

「ひとはみな詩人」だって？

「百歳詩人ぐらい売れなければ詩人とはいえない」とはだれの言かな？

社会的弱者を特権視しては釜ヶ崎云々、

被災地云々してきたのはどこのだれなんだ？

おいぼれの長谷川龍生か？

それとも大阪文学学校のぼんくらどもか？

答えなくてもいいぜ。

おれは反応を愉しんでるだけだしな。

たとえばおれがあんたのいうように政治家や学者を登場させたところで、あんたは「なぜブルーカラーや主婦を無視するのか」と宣ったらろうね。

おれは今もブルーカラーの人間だから、

そういっただけが、

そこに勝手な空想でつけ込んで非難する、

あんたのゲスっぷりたらブルーレットも真っ青だ。

おまえに未来なんてないんだぜ、

ここに墓をおっ立てるんだ

おまえに作品なんてないんだぜ、

ここであそこをおっ勃てるんだ

でたらめなバベル

そいつはでたらめなバベル

おれは分数の割り算も三角法も、
わからない無教養者。

だから黙って施しを寄越せ。

でもこいつはジョークなんだ、

チベットや天安門がないように南京もないだけのこと。

おまえがおれを下衆呼ばわりするならおまえは連続強姦魔、

いつもいつもいつもオナニーばかり考えてる

それで勝ったつもりでいるのなら、なお憐れだね。

壁からいつまで逃げるつもりなんだ？

ひとを貶したっててめえを高めることなんざできないぜ

だれもたったひとりで学ぶんだ

カルチャークラブの仲良しごっこ？

コントラたちとおまえなんか同根なんだぜ？

あんたのゲスつぶりたらスイスチーズも射精する。

おまえに未来なんてないんだぜ、

ここに墓をおっ立てるんだ
おまえに作品なんてないんだぜ、
ここであそこをおっ勃てるんだ
でたらめなバベル
そいつはでたらめなバブル

清順が死んだ夜

一期の夢やまぼろしのなか

映画音楽というものはおそろく

残り香に過ぎない

フィルムにしたっていつかは滅びて

棄てられる

多くのひとの夢は

おれ自身の夢と拮抗し、

またちがった現実と入れ替わって、

まざりあうだろう

だからなにも悔やむ必要はないんだ

いつときの愉楽のためにこの世界に映画はあるんだから

わるいやつらはみな殺しすればいい

車には火を放てばいい

かわいい女の子たちには悪女としての余生を与えてあげればいい
だれだってほんとうはいいひとにはあきあきなんだから

清順が死んだ夜になって

おれは働いてた酒場で

「殺しの烙印」の音楽をかけた

もしかすれば「くたばれ悪党ども」のほうが

よかったかも知れない

おれだって

できることなら

星ナオミと

チャールストンを踊りたいから

あるいは禰津良子と

死んでしまいたいから

映画には見せ場が必要だ

小津は退屈だ

熊井は社会派という迷妄に終わった

中平は黒い羊だった

蔵原はヌーベル・バーグをプログラム・ピクチャアに灼きつけた

そして清順は「映画なんか娯楽だ、滅びてなくなってしまうばいい」とかぼやき、倒れた壁のむこうにある、

純白のホリゾントは血の色になって、

なにもかもが伝説として

嘲笑されるのである

清順師、

あなたにいえることはなにもありません

ただ天国などというものはさっさと爆破してしまってくださいませ

調布の撮影所よりもたちのわるい代物を

売れ残った復讐天使たちとともに

いつか

お会いしたいです

では

お元気で

部外者

女の子と手をつなぎたい

そしてふたりきりで

歩く

ものはみな失せ

神殿は消失するだろう

わたしも

きみも

うちなる熾き火が消えるまで

電話口や

スーパーマーケットや

台所で

おもいつきりケンカしよう

きみみたいな女の子と手をつなぎたい
そしてふたりきりで

眠る

きよの午後十時半

わたしの室にどうぞ

わたしの頬に温かい平手打ちをして欲しい、

頼むよ

愛

山下晴代、そしてかの女のゆうじん、かの女の誹謗中傷に「いいね！」するひとびとへ

愛を説くほどに

憎しみは募る

ことばは

ない

金槌と

エールワインの染み

あるいは頭蓋骨の唸り

その曲線を憶えろ

その嘶きを抱えながら

かの女は偏愛する、

か弱いものたちのか弱さを

か弱いものたちの永遠の無力さと善良さを

シリアの民はわたしに楯突かない

ホロコーストの生き残りはわたしに異議を唱えない

わたしはかれらかの女らの味方です

もちろんガス室に送られる、多くの犬たち

でも猫は殺されるべきです

うるたえておれはいいかえす

愛する

ということはおくということ、

すなわちぼくらの鏡には

あなたは映ってません

なぜあなたはぼくの

かの女たちの

ことを

規定したがるのです？

それはあなたの倫理がわたしたちとはちがうからです

あなたの道徳が、波形が、感情が、

わたしたちが好きだったかつての道徳でも、

倫理でも、生き方でもないからです

くたばりなさい、

醜い日の本の貧者たち、

狂人たち、

シリアの民は美しい

ロヒンギャは美しい、でも、

あなたがたは醜いのです

相対的な貧しさは、

黄色い民のいいわけ

おまえらのころなど

価値はないのです

去るべきです、

そう詩人の妻はいった

わたしはなにをいっても赦される

わたしのうしろには善良なるひとびとがいるから

わたしは正しい、

わたしはあなたがた悪人のすべてを知っているから

滅びなさい

滅びなさい

あなたのことなんてどうでもいいのですから

はじめから関心もありません

あなたはわたしの飼犬以下の存在です

わたしに絡まれるのがいやならば家に閉じこもっていなさい

おれはいう、

おまえをぜったいに赦さない

おまえらを殺す

おまえらの愛を葬ると

きみにとっておれが善良でなくとも

すべての郵便局が驟雨に吞まえてしまえに

メルセデスを叩き潰し

それからふたりにで甲殻類を喰いにいこう

モノマネ鳥が鳴きやむまで

腹いっぱい

タクシーは油虫みたいにロータリーで睦む

けつきよく選択肢はどこにもない

あるいは恋人たちとともにして

アスパラガスにしがみつく

幸運、それは天使の唾

大勢のひとびとが

偶然と必然を取りちがえ

真っ青なソフトの罅に手を手をかけてる

おはよう

おれの悪友たち、そして悪運たち

名づけられたもの

名づけ得なかったもののためにメツセーシュミットに乗り込んで

銀色の類人猿を観賞する

おそらくおれがしてやれるのはもっと最悪なやり方で

きみの善良さ、きみの美しさを讃えること

胸いっぱい

豚

かれらの人間性？

おれの人間性？

あるいはかの女らの人間性がベーコンみたいにわるい臭いを放つ

2018

鰯なんかでよかったのか、きみは？

まさかきみが信仰であり

おれこそが鰯の頭だなんてね

そんなことまるで首にもださないで、きみは？

あたらしいスキレットを買ったんだって

それがふたりのちぎりだなんて聞きたくもない

頼むから帰って欲しい

さっさと黙っていつもどおりしてもらいたい！

どうやらアンテナかけ忘れていたらしいのよ

ばかにノイズと周波数のずれがあるもんで

調べてみたらこのありまさ

えー、こちらはイワシのアタマ、

ゴキネンなロックを聞きながら最後まで一緒にして
だつてわたしが怖がりなのを知ってるくせに

かれは逃げてしまったの

苦しんで死んでもらつたの

たぶんかれもおひとやかで

文法にも音節にも

あどけない、自堕落な男だったら

よかつたのに

あー、わたしについてないんだなあ

それからウエストレイク氏はパーマメントの鬘から

盗聴器を取り出しながら吐息する

——うむ、愛は美しい

ふたりの愛が決して交差せず、結び合わないときこそが

ウエストレイクはそうつぶやき、

われわれのオフィスから離れた、

内通者たちのスタジオに入る

ふたりには死んでもらうよ

ウエストレイク？

もちろんかれも例外ではない

あなたにどれほどぼくは傷つけられて来たのか

そんなこともうどうでだっていい

水根の薄皮をいちいちまい剥いでしまみたいな

この自身のいたいけさがきらいだ

なによりも無粋で、

なによりもぶっかこうに

怒りをふりあげるんだ

でもこんな光景ですら、しみじみと語れてしまう

いったいぼくが、どうしていったい、ぼくになり果てたのだろう

重しを垂れたノアの黒い大工たちが

あちらこちらでぼくを唾ってる

ああ、なんと健気なんだろう

ブルーズよりも、それらしくあり

あなた以上に、きみなんだ

刷毛は唸り、

床板につんのめる、

うるるるる、

うるるるる、

——聞えますか？

愛しいひと。

あなたのことなんざ

顔だって声だって

この一月の水根のまんまで腐って、腐れ、

——腐れってば！

祝婚歌

あたたかい、

水色の薬

あるいはもっとも深いところで芽吹くだろう、

角だ

ぼくまだなにも知らないのにきみやかれのことを思い浮べる

それは12月の果て

週末にひらいた、

芯

金色の

まぐあい

そんなものくそくらえ

だけれど

きみらがたがいの病いのなかで

奪いあい、

充たされあうことを

この歌で伝えよう

安手の仮面をたたきわって

これからもずっとかれのことを愛してやりな

うそがばれても笑えるくらい、

銀色の厨で

飛ぶ

ぼくはたぶん愛をしらないんだろう、

だからこうして立っていられるんだ

この歌をいつかきみたちに聴かせてしまおう

母碑銘

母さん

どうかできうるかぎり

惨めでおろかしく

死んでください

そうすればぼくはきつとこの世界で

もう少しうまくはやっていける

棘をもっとたんさんひとびとに惜しみなく与え

改行のかぎりを尽くしてこの歌を

シヨーマンに捧げよう

もはやとどかないどっかで

母さんは養老院で働く

婚姻という不幸

出産というわざわいに照らして

あなたはよくぞこのぼくを飯給ってくれましたね
姉も三人の妹たちもあなたにとって最愛であって、
ぼくはあなたがたの生贄であり、

苦役人なのです

囚人よりはましかもしれません、でも母さん、

あなたは父の暴虐からぼくを見棄てた

壇のなかの蟋蟀が死んでしまったのを合図に町は沈黙するだろう

もうしばらく鳴き声がしなくなった

ぼくだってもうなにも書きたくはないのです

舞台のうえで

陽気な歌を唄い、

天籟というものを無知のなかで、

涙ぐみながら信じたい

そして音楽史にささやかになまえを残したい

ぼくを見限った植村徹や阪本大地

苦楽園で宝石修理をやってる吉村大助、

はじめから友だちなんかじゃなかった多くのひと

おれをきらった不動産屋の娘、寺尾麗奈

かの女とともにいやがらせをしつづけた竹内紗代

冷たい眼でおれを蔑んだ宇都まどか

おれにちかづいてはなれてった浅田久美

鹿児島で写真館をやってる福永麻里

そして最悪にして最愛だった初恋の村上友佳子よ

そしてやさしさがわからないまま傷つけてしまったすべてよ

うれしい夢はすべて終わった

画家の野崎義成から絶縁され

かれの手紙をぜんぶ焼き捨てた

疲れきって帰ればまたしてもぼくはじぶんを責めてる

自殺を図った長安怜よ、

ぼくがぜんぶわるいといったらきみは赦してくれるだろうか

きみのことを幾度か夢に見るよ、きみと楽しい時間と酒をやる夢だ

でもきみはいうだろう、自閉症なんて甘えだと

ぼくに友情は似合わない

さようなら、みんな

ぼくは20世紀の喜劇人になりたい

さようなら、母さん

ぼくは16ビートで弾けない
カッティングができない

母さん

どうかできうるかぎり

惨めでおろかしく

死んでください！

死んでください！

ぼくは憶えてる、かつてぼくらが若かったときを——わどがさ

この詩集に収められているのは19歳から34歳までの詩篇で現存するもののみだ。残念なことに初期のビートニクなものは「速度狂」以外は残っていない。自身では傑作の部類であった、「好きなもの」や「われら走者」、「死とうそ」、「風や、風や、風やら」、「雪のてっぽう」、「青年」、「リチャード氏の埋葬に関する余興」などはとうにない。ハードディスクの盗難、師匠である森忠明に破門され、送った作品を焼かれましたこと、コンピュータの破損、そして今年の8月には制作途中のすべての原稿が故障で消えてしまった。書きかけだった新人賞のための中篇小説もだ。この詩集も原稿をいちからやり直した。あまりにじぶんの馬鹿さ加減にあきれて立ち止まってしまおう。——たしか「好きなもの」の冒頭はこうだ、

昼より夜が

愛することより恋することが

降りる駅よりずっとさきの降りない駅のほうが

関西弁より東北弁が

太宰治よりも織田作之助が

文藝よりもアクション映画が

赤木圭一郎より渡哲也が

渡哲也より穴戸錠が

吉永小百合よりも松原智恵子が好きだ

石原裕次郎なんかきらいだ

そして終わりはこう結ばれる、

だけどぼくは

みじめなぼくよりも

みじめなきみが好きだ！

この詩は「詩のボクシング」の姫路予選でも読んだが、もう詳しく憶えてない。「なぜ怒っているのか？」という評をそのとき下された。救いがたい営みのなかで多くの詩が消えていき、わたしは指を銜えて見ているしかない。なぜ、いまさら多くの未収録作に眼をむけたのかといえ、この15年という歳月を再考してみたかったからだ。わたしはわたしの作品にあまりにも無頓着過ぎたし、スタイルというものを持つのにあまりにも時間がかかってしまった。ここではあえてネットの内輪ネタや下品な詩も含めている。清濁併せ持ったこの詩集を無料配布することで、あたらしい作品にとり組みたい。

'18年9月9日／なかたみつほ

in my notebook / unselected poems:2003-2018

2003, 2004, 2005, 2006, 2007, 2008, 2009, 2010, 2011, 2012, 2013, 2014, 2015, 2016, 2017, 2018 by Mitzho Nakata

ぼくの雑記帖——中田満帆詩集／未収録作品集

発行日 2018年9月18日・無料配布

発行人 中田満帆

発行所 a missing person's press

〒651-0092 兵庫縣神戸市中央区生田町1-1-13

新神戸マンション北館303號

mitzho84@gmail.com

Printed in Japan